

マヤノがかわいい。

#NkY

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マヤノトツプガンと、その可愛さに一目惚れしガチ恋勢と化したウマ娘（人間転生勢）が、トウインクル・シリーズに挑んでいくお話。

マヤノ以外にもいろんなウマ娘が出てきますが、あくまでもマヤノです。

目次

1	ぷろろーぐ マヤノがかわいい!!	45
第1話	マヤノがねとられた	4
第2話	マヤノは勘がするどい	9
第3話	マヤノのトレーナー	14
第4話	マヤノですら通用しない!?	21
21		
第5話	マヤノとマッチレース!	28
28		
第6話	マヤノがかわいい定期	33
第7話	マヤノ、テイクオフ!	37
第8話	マヤノと走ったあの子は	37
37		
33		
37		
45		
第9話	マヤノとすごす夏!	51
第10話	マヤノ、いざ前哨戦へ!	58
58		
第11話	マヤノにスリリングな提案を	65
65		
71		
第12話	マヤノがかわいい定期	71
71		
第13話	マヤノ「おもってたのどち がーう!!」	77
77		
第14話	マヤノに勝負服が届きました	82
82		
第15話	マヤノ、最強の称号を求めて	82
82		

第16話 マヤノがんばれーっ!!

96

第17話 マヤノ、勝利のランディング

!

第18話 3つの『呪い』

第19話 アタシの夢は

第20話 その想い、成就させないから

第21話 マヤノに続け!

89

104

111

117

125

135

ぷろろーぐ マヤノがかわいい!!

え。何この子。かわいい。ちょうかわいい。可愛いが過ぎて心臓が止まった……。

一目惚れ、というのを前世から通算して初めて体験した。その相手が入試の場面、しかも女の子だつてのは中々に意外だったけどさ、我ながら。

トレセン学園の入学試験。そこでは学力テストの他に体力測定もあり、最後に短距離コースでのタイム測定を実際のレース形式で行う。そこでアタシと同じ組になったのが、自信ありげな笑みを見せてレース開始を待ちわびていた彼女——マヤノトツプガンだつたんだ。

マヤノトツプガンのどこがかわいいか。まず、ちっこい。目がくりつとしてる。ほぼオレンジ色の明るい茶色をした、少しくせつ毛気味のロングヘア。それを横に2つちまつと軽くまとめて、あとは後ろに思い切り流すという料理の仕方。かわいいし、何ならそのかわいさを自分らしく活かすセンスもある。天才。

てか、そう！ その子天才なんよ。多分それに気づいてるのアタシだけみたいな感あるんだけどね？ 結果から言えばアタシは3着でマヤノトツプガンは5着だったんだけど、多分マヤノトツプガン……以下マヤノは、まだまだ身体が未完成なだけでレース

センスは抜群だと思ってるの。……だってレーススペースを的確に見抜いた走り方をしてたんだよ。アタシは前に行かなきゃ上手いことレース出来ないようなウマ娘っぽいんだけどさ？ マヤノは最初後方に控えてたのに『これ遅くなるな』ってアタシが思った瞬間にはもうアタシより前に出てきてたんだよ！ そんな子今まで会ったことすらなかったから……ちよつと鳥肌立ったよね。

そんな可愛くて天才なマヤノちゃん……トレセン学園に入って、同室になりました。そこでアタシは更に思い知ることとなる。

「マヤ、キミと再会できてとーっても嬉しいんだ!!」

彼女の肉面的な可愛さを……！

「アタシもだよおおおおお!!」

「ふぎや」

抱きしめる。めちやくちやいい匂いがした。天国か。天国だわ。

ああ……ああ。マヤノが、アタシのマヤノが、かわいい……っ……。

「ご、ごめん。取り乱した……改めて。これから長い付き合いになるけど、よろしくね」

「うん！ よろしく、バブちゃん！」

「バブちゃんと呼びはNG！」

「えー。かわいいじゃん。ぶーぶー」

「マヤノはかわいいけどそれとこれとは別!!」

そんなこんなで。マヤノと過ごす、アタシのトレセン学園生活が幕を開けたのだった
!

……ん？ アタシの前世？ 大して面白くないから話さないよ？ 今から始まる幸
せ満点ハートフルな物語と比べりゃ、ね！

第1話 マヤノがねとられた

アタシとかわいいかわいいマヤノは同じ時期にトレセン学園に入学を果たした。その時はマヤノよりアタシの方が少々速かったのだけど、スカウトを先に受けたのはマヤノの方だった。……というか、マヤノ曰く。

「オトナの魅力でトレーナーちゃんのハートを掴んじゃった!」

てな感じで、なんかタイプのリレーナーを見つけて猛アピールして押し切ったとか何とか。要はマヤノからの逆スカウトって訳なんだけど……何はともあれアタシのマヤノを横取りしやがって。唐突に百合の間に入ってくる男が出てきてハートフル終了のお知らせだよ。まじ許せねえ。

「……バブちゃん? 顔が怖いよ?」

「え? あ、うん、何でもない。あとバブちゃん呼びだけはやめい」

……え? マヤノに勝ってるアタシが何でスカウトされてないかって? ……ほら、アタシってさ、身体能力だけでここに入ったようなもんだからさ、テストがいつつも赤点で補講常連で、おまけに先生から

「いくら能力があろうと、学業をなんとかしないと選抜レースには出られないぞ」

って言われて。悲しい。せつかく才能に恵まれた身体を手に入れて人生やり直せてるつてのに、頭が悪いつてとこまで引き継がなくても。

結局のところ。アタシはまだトレーナーにアピールできる機会を手に入れておらず、しかも頭が致命的に悪い噂もなんか広まってしまっており……『身体能力は確かにあるが学業がよろしくなく、レース脳もあんまりよくない』なんて変な評価を下されてスカウトが1個も来ないんだよつ！　なんでつ！　なんでえつ！　アタシの愛したマヤノも寝取られるし!!　どこのウマ娘の骨が分かんないような男にい!!

……あ。でも。

「……お、結構いいタイムだ。調子良いじゃないかマヤノ」

「えへへー♪　ごほうびになでなでしてほしいな……?」

「はいはい。なでたからには次の模擬レース、頑張れよ」

「もつちろん！　絶対勝つから！　だから、マヤのこと見ててね……?」

は？　流れ弾がこっちに当たってしんだんだけど。

そんな感じで、アタシには絶対見せないようなしつぽふりつふりでこれのマヤノを見させてくれるのには感謝ね……。ほんつとうに可愛い……天使か……。

ついでにマヤノって結構ワガママな子なのにあのトレーナーはちゃんと制御出来るし、あと指導内容も悪くないし、何よりマヤノが完全に信頼しきってるし……あと、何

だかんだ顔もいいし。正直お似合いじゃねーか、くっそー……。

「……お前も走るか？」

「いや。いいです。どうぞ存分にウチのマヤノとイチャイチャしてください」

「……」

ホントは走りたいけど。なんかコイツ相手には正直になれん……。

「えー？ バブちゃん一緒に走れないのー？」

「えっ？ あー……んー……走、る……」

なおマヤノには弱い模様。そうやって急遽併走をすることに。

もちろんマヤノの飲み込みとかが早いってのもあるけど、トレーナーの力って凄い。ちよつと前ならアタシが前を走れたのに、今じゃもうマヤノの方が圧倒的に上。元々マヤノが持っていたレース運びの上手さに、成長度合いにばつちり合ったトレーニングをこなしたことでちゃんとフィジカルまで備わったマヤノはもう無敵。確かに最初の方は前を走れるんだけど、実はマヤノに風除けにされてるだけ。第4コーナーですつと横に並べられなんか上手いことかわされてじりじりと突き放される。まだ食らいついてはいけてるんだけど、そのうち5バ身くらい差を付けられそうな感じさえもする。

「はあ、はあ……マヤノ、強くなつたねえー……」

「ふふーん、トレーナーちゃんのおかげだもんねー！」

「トレーナーちゃん、か……」

アタシはムツとしてトレーナーを横目でにらんだ。トレーナーは肩をすくめて『どうしたものかなー』って顔をした。その気がなくてもそういうことをしてるんだから犯罪なの。

しかし、その仕草を見せたのもつかの間。何か急に真剣な表情になって、なんとなくことを言ってきたのだ。

「……なあ。俺から提案があるんだが」

「何？」

「君をスカウトさせてもらってもいいか？」

スカウト？ アタシを？ マヤノという存在がいるのにもかかわらず？

は?????

「は？ は？ マヤノひとりには飽き足らず？ アタシにも手を出そうと?? は??！」

「君は何かとんでもない誤解をしている」

「滅べ変態」

「……」

ついつい勢いでつつけんどんな態度を取ってしまった。しまった、と思った時にはもう遅い。

トレーナーにスカウトされてチームに入らないとトウインクル・シリーズには出られ

ない。しかもその状況がずっと続くようなものならコース変更や退学を余儀なくされる。その上今のアタシを取り巻く状況からして、他のトレーナーからのスカウトなんてほぼ飛んでこないだろう。スカウトされるということはトレセン学園の生徒から見ればとんでもないチャンスであるわけだ。

当然そのスカウトを引き受けるべきだと思うし、何ならほんとは彼にスカウトされたい。マヤノとしっかり向き合ったうえで、マヤノの実力をちゃんと引き出せてるトレーナーなんでもん。

なのに。なのになのに、なのに！ 唐突な提案であつたせいもあるんだろうけど、いや、多分唐突じゃなくても——アタシは彼に、素直になれない。マヤノを取られたつてせいだけで。マヤノを取られたつて……思い込んでる、せいで……。

分かってる。分かってんの。だけど、なんなんだろ。なんなんだろ、ほんと。モヤモヤしてる。そんなしよーもないモヤモヤなんて振り払いたいよ。

なのに、振り払えないよっ！

そんな心中を悟られないよう、アタシはトレーナーとマヤノの元から全速力で逃げていった。どうしようも、できなかつたから。

……どうせマヤノには、気づかれてるだろうけど。

第2話 マヤノは勘がするぞい

「ホントは入りたいんでしょ。トレーナーちゃんチームに」

寮室。アタシはかわいいマヤノからの追及を受けていた。もうね。マヤノをどこまでやるだなんてそんなの考えちゃいけない。逃げたときも、何となくこうやって来るだろうなって分かってた。そんなところもかわいいし嬉しい。

「……うん」

「なんで逃げたの？」

「アタシにも分かんない」

アタシはマヤノの背を向けてベッドでごろごろしている。

「マヤはバブちゃんと一緒のチームで練習したいの。バブちゃんもそうでしょ？」

「それは、そう」

「じゃあなんで逃げちゃうの？ 『いいよ』 って言えば済んじゃう話じゃん」

「……言えないんだ。今のアタシには」

「……？」

たぶんマヤノみたいな子には、アタシの持つてるこの感覚が分かんないだろうなって

思う。それを分かり切ってアタシは話をしてるから、怒るとかかっていう感情は一切持たない。……でも、マヤノの素直さってすごく羨ましいよね。こういう、しなくてもいい、分かり切っている損をしなくていいんだから。

「じゃあ今度、マヤと一緒にスカウト受けるって話しょ？」

「ううん。それだけはアタシがやる」

「えー？　なんで？」

アタシは起き上がってマヤノと向き合った。

「トレーナーとの契約ってすごく大事じゃん。……大事な話は、アタシがちゃんとやりたい」

マヤノはアタシの話を聞くと、静かにうなずいた。

「……うん。一緒にチームで練習できること、楽しみにしてるよ。バブちゃん」

「バブちゃんはやめてくんないかな……」

そう言いながらも、アタシはどこか寂しかったというか、満たされたかったん、だと、思う。

身体は正直なもので、気が付けばマヤノを大きなぬいぐるみのようにぎゅっとしていた。マヤノは特段驚いたりせず、けれどちよつと不思議そうにしながらもアタシの抱擁を受けいていた。しつぽをゆっくり揺らしながら。

「マヤと一緒に寝よっか」

「うん」

マヤノがどう思っているのかは分からない。けど、こういう甘い甘い生活が続いているのは、アタシにとって確実に幸せだった。

そして、それは明日へのエネルギーになる……。

「すやあ……」

とは限らない。

「……起きなさい」

「ふえっ!？」

「授業中連続就寝記録更新、と……課題、増やしておくからな」

「うぐっ……は、はい……」

じ、授業が退屈なのが、悪いんだから……。

理由はともあれ、置かれている状況とか、自分自身とか、そういうものが急に変わるなんてことはないのだった。

「変わったといったら、昨日思いもよらぬスカウトを受けたくらいなんだよね……」

「えっ!? やるじゃん!」

「うわっ声大きい」

アタシの増えた課題に付き合ってくれてる友人、ナイスネイチャが驚きのあまり立ち上がった。

「で? とーぜんスカウト受けたんだよね?」

「ううん。断った」

「えっ!?!」

「声大きい……」

地味だー普通だーって自分の事を言ってるネイチャだけど、実は結構反応が大きなところあるんだよね。そういうところ好きだけど。

「だってマヤノを寝取ったヤツだよ? なーんかムカついて、断った」

「寝取ったって大げさな……でももったいなくない? 選抜レースじゃないとここで直接スカウトされるだなんて貴重でしょ?」

「まあ、そうなんだけどさ」

「……なるほどね。素直になれんのか」

「なーんでウマ娘という種族はみんな勘が鋭いのかね」

なぜいとも簡単に凶星を当ててくるんだ。

「だって若干ツンデレの感のあるバブちゃんのことでしょ？ 鈍感なネイチャさんにも分かりやすいって」

「ツンデレじゃないしバブちゃんじゃないし分かりやすすくないから『ナイスネイチャン』」

「ネイチャンじゃないっての」

とりあえずその場をうやむやにしたけど、そつかー……分かりやすいかー……。

「まー、どうするかはバブル次第だけどさ。スカウトを受けるんなら素直に言った方がいいよ、やっぱ」

「でも結構ひどい態度取った手前、中々ねー……」

「それは自業自得」

「うっ」

「でも、ウマ娘は気性が荒い子多いから、そのくらい寛容なトレーナーは多いんじゃない？ それにチームに入りたい気持ち、多分あのトレーナーさんにも見抜かれてるんじゃないかなーって思ってる」

「……うっわ、はっず」

アタシは机に顔を突っ伏した。

トレセン学園のみんなは、勘がするどい……。

第3話 マヤノのトレーナー

マヤノはかわいい。それはもう全人類の常識といつても過言ではない。容姿性格仕草全部取つても非のつけようがないくらいにかわいい。そんなの今更言うこともないような当たり前のことだ。

当然、そんなかわいいかわいいマヤノと一緒に過ごせる時間は多い方がいい。トレーニングでもマヤノの匂いと汗と吐息を浴びつつお互いに高め合っていければ、マヤノもアタシももつともつと強くなれる。

けれど、それをつけてくれるトレーナーがかわいいとは限らない。というか、マヤノを寝取つた……というか、マヤノをメロメロにさせた……てかもうそれは寝取つたつて言つてもいいよね。うん。そんなやつ。ちゃんと見れば、一線を踏み越えないようにしているっぽいし、トレーニングはしっかりつけてるらしいし、事実トレーナーがついたマヤノにアタシは追い越されたし……否定する要素はなにもないどころか、むしろ契約を結ぶべき優良トレーナーっぽいんだけど。むしろスカウトされたんだけど。

「なあ。考えを改めてくれる気はないか？」

「……………」

「お、おいー！」

どーにも。アタシは。素直になれんでいた。

分かつてる。分かつてるんだけどね？ でも、接する人によつて、見せる顔つてのは違つてくると思うの。たとえばマヤノにはマヤノにしか見せないアタシがいるし、ネイチャにはネイチャに見せる雑に話すアタシがいる。先生には先生に見せる、授業中に寝て怒られるキャラと化しているアタシがいる。

そして、そのトレーナーには……マヤノを奪われたからか、やけに当たりの強いキャラとして振る舞つてしまう風になつちやつてゐるわけ。今更、急に振る舞いを変えるのつて、なんか、ほら……：難しいじゃん？ 分かつてよ。

ホントはマヤノと一緒にになりたいがために、スカウトを受けたいんだけど……乙女心 is 複雑 & コンプレックスつて感じなんだよね。

……嫌われてもおかしくないよ。なのに、あのマヤノのトレーナー。

「お疲れ様。自主練帰りか？」

「っ……」

フーセンガムを噛みながら帰るアタシを目ざとく見つけては声を掛けるんだ。もう既にマヤノトップガンつていうダイヤの原石を掘り当てているにもかかわらず、だよ。

……何なの。コイツ。そして、それにもかかわらずつつけんどんな態度を取り続ける

アタシ……何なの。

「なあ、俺の話を少し聞いてくれないか」

「……その前に。アタシから」

トレーナーの言葉を制して質問する。

「なんでこんなひどい態度を取るアタシに、声を掛け続ける訳……？」

「はは……何でだろうな」

「……呆れた。馬鹿でしょ」

「かもしれないな」

アタシの言葉も意に介さずって感じ。……何だろう。馬鹿なのがアタシみたい。て

か実際、そうなん、だけど。

「マヤノだけじゃダメってこと？」

「それもある。というか、キミが必要なんだ」

「……何で」

「マヤノをもっと強くするためには、キミという友達……ライバルが必要なんだ」

「ライバル……アタシと、マヤノが？」

ライバル。そんな感じには思ってたなかった。というか、マヤノもそうは思っていないんじゃないじゃ？

「そんなの、アタシとマヤノも思っていない。勝手に決めつけないで」

「……そうなのか？　じゃあ、これからライバルになるってことで」

「うざったい……」

飄々と交わしていくのがもう、なんか、ずるい。

何だろう。一回コイツと話してやろう、って思ったのが終わりなのかもしれない。話では絶対勝てない、と悟ったときにはもう遅すぎたんだ。

「キミも分かる通り、マヤノトツプガンはことレースの勘に対しては非常に長けているものがある。そして、そのレース勘を生かすことが出来るフィジカルの面でも並々ならぬポテンシャルも感じている。あとは……まあ、ちよつと古臭い考え方というか、精神論になるんだが……勝負に対する根性とか、熱意。モチベーションが必要なんだ」

……確かに。マヤノはレースを楽しむてはいるけれど、どこか楽しみすぎているきらいがある、気がする。やはり、このトレーナーはマヤノのことをちゃんと見ている。悔しいが。

「そこでもう一人、実力があるウマ娘が欲しい。……キミのことだ」

「何でアタシなんですか。他にもいっぱい……」

「マヤノと走りたいんだろ？」

それはズルいだろ。

「…………それは…………そう…………だけど」

「あの時の併走も見事だった。正直トレーナーの付いていないキミにはマヤノとは勝負にならないと思っていたんだが、ほぼ完璧なレース運びをしたマヤノ相手に見事ギリギリまで食らいついてみせた。それを見て決めたんだ、『俺はこの子を絶対にスカウトしてみせる』ってな」

「…………」

何。何なの、この人。飄々とかわす話術もあれば、熱意も本物。その瞳の奥にはめらめらと炎がたぎっているようにすら思える。…………顔も、いいし。

やっぱり、この人、いい人だ。アタシはそう思った。思わざるをえなかった。ああ、マヤノが惚れこむのにもうなずけるよな…………。

アタシはずっと噛み続けていたフーセンガムを口から出し、ポケットに入れていた銀紙に包んだ。

「…………俺のチームに来てくれないか。キミをトウインクル・シリーズの舞台で輝かせたい」

トレーナーはアタシの目を食い入るように見つめた。アタシは目を逸らしたままだ。

今この瞬間ふと心に浮かんできた、最後の質問をしたい。

「アタシは、マヤノのサポートとか、バックアップとして欲しいんですか？」

「違う」

即答だった。

「キミはマヤノのライバルになるんだ。マヤノほどの実力者のライバルが務まるウマ娘をサポートに甘んじさせるような馬鹿なマネはしない。……キミも一緒に輝くん」

……トレーナーは決意を込めて、アタシの名前を口にした。

ズルい。

「……あんたって、ホントズルい」

「ダメか？」

「……早く紙を出して。サインするから」

「……！ 本当か！ 待ってろ、今契約書出すからな……！」

子供っぽくはしゃいで慌ててカバンから契約書を取り出そうとするトレーナー。

「あはは……なんでアタシ、こんな単純なヤツに押し切られちゃったんだろうな……」

でも、アタシの意志とは裏腹に、勝手に口角が上がってしまったのだ。……実際、マヤノと同じチームで走れるのは嬉しい。

「……あ」

「え？」

トレーナーが固まる。

「そういえばキミは、選抜レース……1回でも出たのか？」

「いや。……あ」

思い出した。

トレセン学園の規則。トレーナー契約を結ぶことができるウマ娘は、選抜レースに1回でも出たことがあるウマ娘のみ。

そして、アタシは極度の学業不振により選抜レース出場が未だかなわず。

つまり。

「……よし。勉強合宿をするぞ」

そうなるわけでありまして。

「うあああああああああああ!!!」

こうして、アタシはしばらく地獄の勉強漬けが始まってしまふのであった……。

第4話 マヤノですら通用しない!?

マヤノが勝てない。メイクデビューにすらたどり着けない。アタシもトレーナーも衝撃を受けた。

しかし、一番衝撃を受けているのは。

「なんで……なんで……っ!!」

マヤノトツプガン、本人だった。

原因はハッキリとしている。ジュニア級ウマ娘によくある成長期故の成長痛^エだ。それによって全力のトレーニングが出来ない状態がここ最近ずっと続いている。レースに關しても慎重を要し、膝の負担が大きい芝を避けて、ダートの短距離を適正な舞台でないのを承知で使うしかなかった。

そして、マヤノは持ち前のセンスでそれなりには善戦するも……適正外のレースに出ていることに加え、順調にトレーニングを積んでいる他のウマ娘との差はいかんともしがたいものがあつた。たとえレース運びが下手でも能力でゴリ押しされてしまうのだ。

メイクデビューの早さとトウインクル・シリーズでの活躍が比例するわけでは決して

ない。デビューが早くてもその分早くに燃え尽きてしまうウマ娘もいれば、デビューに手間取って遅くなったとしても、じっくりと身体作りをしたのが奏功してG1を獲れるほどにまでなるウマ娘もいる。だが、やはり周りの同じジュニア級のウマ娘たちが続々とデビューを果たし、重賞レースで活躍するさまを指でくわえて見ていることしかできないのは――

「マヤも、早く走りたい、のに……」

――きつとアタシが想像している以上に、辛いんだろう。

「大丈夫だよ。今は、我慢のとき」

「……ありがとう、バブちゃん」

「ん。……あ、でもバブちゃんはやめてほしいな」

結局学力不足が響いて今年中の選抜レース出走が無理そうなアタシは、せめてできうる限りマヤノの近くにいて、マヤノを励まし続けることくらいしかできなかった。ぎゅうっと抱きしめると、マヤノの身体が悔しきで震えてるのがはつきりと分かって、アタシも心がぎゅっと締め付けられるような感じになった。せめてアタシだけでも、笑ってなきやいけないのに……。

そして……状況は一向に解決しないまま、気が付けば12月になってしまっていた。

「これから朝日杯見るんだけど、マヤノも見る？」

「……うん」

レースに出られなくても、存分に練習できなくても……マヤノは、やれることをやっていた。レース観戦もその一環だ。同期が既に活躍しているという悔しさをバネにして。

決してひねくれて、レースへのモチベーションが燃え尽きたりなんかはしていない。テレビを食い入るように見つめるマヤノの瞳には力強い光が差している。ああ……マヤノは、強い。前世のアタシなんかとは、全然違うや。

『2頭並んだが！ わずかにわずかに内！——来年のクラシックはやはり、このウマ娘を中心に展開されます！』

ジュニア級王者の誕生を、マヤノはテレビの前で見る他なかった。

だが……隣にいたマヤノは、このレースを観て火が付いたように思えた。

「みんな強いよ。今のマヤノには勝てない。でも……マヤなら、もつと『上手く』レースができる」

「……っ！」

びり、つとちよつと痛いくらいのオーラをマヤノから感じた。マヤノが、にやりと笑みをこぼした。

確かに……みんな強かった。が、1着のウマ娘は身体能力にものを言わせて押し切ったような勝ち方をしたし、2着のウマ娘は後方一気のものすごい勢いの追い込みを見せたが、なんとなく不器用な感じのあるレース運びだった。

「マヤ、分かっちゃった」

ウマ娘のレースには、何かアタシ達を突き動かすような不思議な熱い力がある。今も昔もずっとそうだし、ずっとそうだからトウインクル・シリーズはこんなにも盛り上がる。

「バブちゃん!」

「ど………どしたの急に立ち上がって……」

「行くよ!」

………こんなにも、人生を変えてくれる。

「………脚は大丈夫?」

「レース見てたら走りたくって仕方ないもんっ! マヤちゃんテイクオフしたい!!」

「分かった。………走るか!」

これってきつと、ウマ娘の逆らえない本能みたいなもの。あのレースを観て、アタシもなんだか走りたくなって身体がうずうずしてきたのだ。二人揃ってジャージに早着替えて、トレセン学園へと飛び出していった。

学園に着いたらその勢いのまま真つ先にトラックコースに向かう……はずだったのだが。

「……あ。バブちゃん」

「どうしたの？」

「先行つてて。……ちよつと、気になってさ」

マヤノはどうやら三女神様の像に何か不思議なものを感じたようだ。何でもあの三女神様の像、たまーに何か不思議な力を分け与えてくれるとかなんとか、そんな噂があつたりなかつたりする。噂なんだけど。

「ふふ、りよーかい。先行つてんね」

アタシは頷いて、先にトラックコースの場所を取っておくことにした。

マヤノの脚の状態を考慮してダートの1200。ただ、アタシもダート短距離は得意ではないため同じ条件。得意な舞台で思う存分走れないのは少々残念ではあるが、けれども今このタイミングを逃せば何か大事なものを二人揃って逃がしてしまう、そんな気がした。

準備運動もアップもばっちり。100%以上の力でマッチレース。マヤノはトウインクル・シリーズ登録済で、アタシはまだ登録されていない。今では実力はマヤノの方

がすっかり上を行っている。

「マヤノ。……今日は、勝つよ」

でも。何故だか『マヤノと』走りたくなつた上に、勝てる気さえもしてきた。

「へえー……マヤに勝つつもりでいるんだ」

マヤノにしては珍しい表情。にやりと口端を釣り上げてアタシを挑発的な笑みで見つめかえす。

「うん。マヤノが大丈夫そうだから、全力で行く」

「……マヤをあんまり見くびらないでほしいな」

火花が散つた。アタシの大好きな人が、ここに居る時だけは最強の敵と化す。

「お二人さーん。そろそろはじめるよー」

その辺にいたネイチヤがスターターを務める。何だか気が抜けている声だ。アタシとマヤノの情熱を絶対零度で冷やそうとすら感じた。

「アイコピーー!! アイコピーーッ!!」

「声ちっさいよ!! もっとアタシたちを破裂させるぐらいに燃え上がらせろよ!!」

「あはは……」

ネイチヤはやれやれといったように頭をかいて……。

「……それじゃあ、お二人さんの熱い気持ちに水を差さないように」

ビリッ。静寂の中電気が走るような緊張感。誤って何かでつつけば、たちまち大爆発を起こしてしまうような張り詰めた空気。

観客はただ一人。走る相手もただ一人。勝っても負けてもなにもない。けれど、それは、アタシとマヤノ以外の人から見てのこと。

「位置に付いて!!」

この想いは。

「よーい!!!」

この気持ちは!

「どんッ!!!」

譲れない——ッ!!

第5話 マヤノとマッチレース!

「どんッ!!」

スターターのナイスネイチャが叫ぶのと同時に、アタシとマヤノは土を思い切り蹴った。

マッチレース。1対1。タイマン。相手はマヤノただ一人! しかも距離はダート1200mの短距離。パワーの要る馬場にて、最初から最後まで全速力で走るという中々に大変なシチュ。

けれど、今のアタシ達はそれをしておかなければいけない気がした。あの、ジュニア級王者を決めるレースを観ただけから。

マヤノとアタシは横に並んでダートコースを駆け抜ける。ややマヤノが先行しているか。足元が砂で埋まり、土ぼこりが舞い上がって足元に掛かっていく感じがする。土は芝に比べてクツション性があるから、確かに脚というか骨にかかる負担は少ない。ただ、脚元に跳ね返る力が弱くなるから速く走り抜けるにはパワーが必要となる。

そして、それが継続して必要となるとなれば、スタミナの消費も芝の比ではない。ましてや短距離だ。最初から最後まで全速力、満タンのタンクを真下にひっくり返すよう

な勢いでスタミナを消費していくタフなレースになる。

アタシの走りは短距離ダート向けじゃない。芝向きだ。正直苦しい。脚の筋肉に確実に蓄積されていく重い疲労を感じつつ、歯を食いしばって何とかマヤノのペースに食らいつく。ただ、マヤノだって短距離ダートは得意じゃない。マヤノが成長痛を抱えている関係でこの舞台にしているというだけだ。お互い苦手な舞台なので条件は互角だが、おそらくデビューもこの舞台で走らざるを得ないマヤノはそれなりにこのシチュを練習してきたのも事実ではある。

……でも、それにしてもだ。何でマヤノの表情は全く苦しそうじゃない？ かなり速いペースだと感じているのだが、マヤノは一点の曇りもない瞳で走るべき道を真っ直ぐ見据えていた。というか、マヤノがわずかに笑ってるようにさえも――。

「っ――！」

しまった、気を取られ過ぎた！ コーナーに差し掛かった瞬間、アタシは身体に掛かる強烈な横Gに耐え切れず、ほんのわずかにバランスを崩して身体の軸がぶれてしまった。たったコンマ数秒のロス。だが、そのロスでマヤノとアタシとの差がハッキリと開いた。

アタシは立て直してまた追いつこうと加速する。しかし、マヤノのコーナーワークは完璧だった。というか、向こう正面にいた時よりもギアが一段上がっているとさえも感じ

た。差は詰まるどころか、もはや開く一方。アタシがバランスを崩していかなかったとしても、今のマヤノには追いつけそうにない。

そう、勝負は最終直線を待たずしてコーナーで決まっちゃってしまっていた。

結果はマヤノの圧勝。せめて差を縮めてやるという意志でアタシも最後まで手を抜かず走りきったのにもかかわらず、マヤノから5バ身ほど離されてしまった。――短距離で、である。

「ひゅー……ひゅー……はー……っ、けほ、くっ、はあっ……」

マヤノはそれほど息を切らせていないが、アタシは息も絶え絶え。歯茎に流れる血液の感覚――鉄の味がめぐるような感覚がひどく気持ち悪かった。

本気で勝てると思ってた。むしろ最初は実際勝っていた。

……なのに、今じゃこの差。デビュー登録済のウマ娘と未デビューのウマ娘の差。それは分かる。

そもそもマヤノの持っている才能はすごい。それも認める。絶対に認める。

でも……めちやくちや、めっちやくちや……。

「悔しい……っ……っ……っ！」

あまりにもゴムの薄い、感情の風船は破裂した。

アタシはマヤノが好きだ。大好きだ。多分狂ってるほどに愛している。でも、だから

と行って負けていいとかそんなつもりは断じてない。マヤノに勝ちたい。ずっと勝っていたい。……負けたくない！ 負けたくない！ 負けたくない！ 負けたくないのに！ アタシは、マヤノに、負けてしまったんだ……しかもあんな、あんな……っ！

アタシは地面に崩れ落ち、土をぶつ叩いた。汗を吸って土がかたくなったせいか、思ったほど土ぼこりは舞わなかった。

「手………いたい、な………」

目から、鼻から、もう何もかもが決壊した。正直、来るよ。来るよ、こんなひどい負け方……。

そんなボロボロのアタシを、生暖かく湿ったやわらかなものが優しくつつんだ。

「バブちゃん」

「……マヤノ」

マヤノに後ろから優しく抱きしめられた。ソエに苦しんでいた時のマヤノに、アタシがしていたときのよう。

マヤノは謝るわけでもなく、かといって勝利を誇るとかでもなく。

……ただ、一言。

「いっしょに走ってくれてありがとう」

思い切り抱きしめられる。背中にマヤノの顔がうずまって、すすする音すら聞こえる。

つられちゃったのかな、アタシに……。

「……悔しい。すごく悔しい。だって勝てるって思ってたんだよ、アタシ」

「うん」

「……強かったよ。マヤノっ……」

「ありがとう……」

お互いが落ち着くまで、アタシはしばらくそこでじつとマヤノに抱きしめられ続けた。いた。

ネイチヤはそんなアタシたちを笑わずに、ただ無言で見守ってくれていた。ネイチヤは何を思ったんだろう。ネイチヤは何だかジジくさいところあるから青春だなー、若いなー、ネイチヤさん羨ましいよ、とか思ってたのかな。その時のネイチヤの表情なんて見てないから、分かんないんだけど。

でも。

「お二人さん。あれだけ全力で走ったんだから、クールダウンちゃんとした方がいいよー?」

その後見せたネイチヤの優しい微笑みだけは印象に残ってる。

第6話 マヤノがかわいい定期

壮絶なマツチレースの後。

「……マヤノ」

「うん」

寮の部屋に帰ってくるなり、アタシとマヤノはぎゅつと手を握った。マヤノの高めな体温が手を伝って身体にじんわりと広がってくる。

そのままゆっくり、自然な流れでマヤノの身体を引き寄せようとする。しかし、マヤノはちよつと拒絶した。

「ね、待って」

「どしたの」

「だって、汗かいてるし砂で汚れてるし」

「今は風呂に行く時間も惜しいの」

「うわっ」

アタシはマヤノを強引に抱き寄せる。一度そうしてしまえば、もうマヤノは抵抗しない。それどころかアタシの腰に手を回して密着してくる。

少し生々しい汗のにおいすら愛おしい。

「ん……」

どれくらい時間が経ったんだろう。アタシとマヤノは、互いに無言のまま玄関でずっと抱き合っていた。目を閉じて、ゆっくり息を吸って、ゆっくり吐いて。マヤノの身体の感触だけを、体温だけを、アタシの世界のぜんぶにした。

今日は、色々、感情が忙しかった。……だから、こうでもしないと落ち着いていけないのだ。こうでも、しないと。

病気ののだろうか。病気なんだろうな。あはは。ちよつと気持ち悪いくらいに甘えたりでひつつきたがりなアタシを許してくれるマヤノに、本当に頭が上がらないな……。

アタシからだろうか、マヤノからだろうか。くつついてた身体が、ゆっくりとほどかれる。

「マヤ」

「……うん」

「だいすき」

「うん……」

それからは言葉を一切交わさなかった。ただ黙々と着替えを準備して大浴場に入り、

汗と泥と、ついでのついさつきまでの悔しさも流してしまった。一応ふたりきりであったけど、それでも言葉のひとつどころか指の一本すらマヤノに触れていない。風呂までくつついてる？ そんなことするとおぼせるでしょ。先のレースで体力をすっかり使い果たしているから尚更。

マヤノといると時折無言が心地いいというときがよくある。意外かもしれないけど、いつつもマヤノと何かぺちやくちや喋ってるわけじゃないし、何なら二人で全く別なことをしてるってことも多々ある。というかそっちの方が多い。ずーつと二人でくつついててずーつと喋ってるー、っていうのは、アタシもマヤノも色んな意味で疲れる。あたりまえ。他の部屋がどうかは知らんけど、でも同じ感じじゃない？

で、今はまさにそんな時だったってこと。

……その後はもう普段通りだ。寮室に戻って普段通りの休みの過ごし方をした。いや、まあ、気まぐれにたまーにちよっかい出したりくつついたりはするんだけど。マヤノかわいいなーって思ってた。

とにかく。

マッチレースをした後で、特別何か関係が変わったって訳じゃない。変わったといえど……以降、なんとなくマヤノがキラキラし始めたような……そうでないような……まあ、なんかよくわかんないんだけどそんな感じがした、ような気がした、のかもしれない

い、と思う……たぶん、きっと、おそらく、メイビー。

そのもやもやとした感覚は、間もなく確信へと変わることになる。

「マヤノーっ!!」

「うわあ!!? 声が大きいわよトレーナーちゃん!」

「デビューだ!!」

「え!?!」

「デビューが決まったぞ! マヤノのデビュー戦だ!!」

「マヤの、デビュー戦……デビュー戦っ!?!」

翌日。年明けにはなるが、ようやくマヤノのデビュー戦が決まった!

第7話 マヤノ、テイクオフ!

未出走ながらマヤノがクラシック級になった1月。まだ年始も年始という時期に、マヤノのデビュー戦は行われる。

ただ、やはり脚元がまだ不安なところがある。適正外ではあるが、慎重を期してのダート1200mでのデビューとなった。同じような理由でこのレースを選択してデビューをするウマ娘も他にいるようで……。

「こんにちは。あなたがマヤノトップガンさんかしら」

「うん! ……ふーん。何だかキミ、強そうだね?」

「あら、さすがは圧倒的一番人気さん。慢心はしないようね」

「マンシン? んー……マンシンってよいかはバクシンってカンジ? どっちでもないけど」

「んん……?」

「今! 私の名前を呼びましたか!」バックシーン

「呼んでない」

レース直前の地下バ道でなんだか奇妙なかおりのする鹿毛のウマ娘がマヤノに話し

かけるのを見る。香水でもつけてるんだらうか？

アタシはトレーナーに質問をした。相変わらずぶっきらぼうになってしまっただ。

「……あんた。この子は？」

「あの子もマヤノと同じ、ソエに苦しみながらなんとかデビューにこぎつけた子だ。もつともマヤノとは違ってあんまり注目されてないようだが……」

「は？ 『だが？』 だがって何？ その煮え切らない言い方腹立つ」

「……」

……なんでアタシはこんなキャラになるんだ。コイツ相手には。

「……まあ、そのだな。この子、きつと強いと思うぞってことだ」

「じゃあ早くそう言え」

「はは、相変わらず手厳しいな」

「……」

好きでそんなキャラやってないんだけどな。はあ。それもこれも全部マヤノをアタシの元から奪いやがったトレーナーが悪い。

とりあえず香水の子がマヤノから遠ざかるのを見て、アタシはマヤノに駆け寄る。緊張なんてしないような性格ではあるけど、現状、学園で行われる複数人での模擬レースではマヤノは勝ち星から遠のいている。勝利のイメージが浮かばない、なんてことが

あつたら相当まずいが……。

「マヤノ！」

「バブちゃん!!」

「ふふ、バブちゃんじゃないっての……」

アタシを呼ぶマヤノの声が地下バ道に響く。全然大丈夫なようだ。しつぽもめつちや横に振れてるし。てかほんと嬉しそう。マヤノかわいいすぎ。

「バブちゃん。マヤのことから、目を離さないでね」

「最初からマヤノのことしか見てないよ。ファイト！」

「うん！　じゃあ、行ってくるね！」

「いってらー！」

ぱちーん！　アタシとマヤノの手のひらが気持ちのいい音を立てて合わさった。これで気合いも入ったことだろう。……ハイタッチの後の、ちよつとひりつとする余韻が気持ちいいな。

……マヤノ。頑張つて！

—京都レース場　メイクデビュー　ダート1200m　16人立て—

7枠13番　マヤノトップガン　1番人気

4 枠7番 なんかすごい香りの子 2番人気

ゲートが開いた。マヤノ、かなりいいスタートを切った! ダートで短距離でスタートもいいとなれば、マヤノは当然前目につける。まるでシニアのウマ娘かと思ふうほどスムーズに3番手の位置を確保。さすがは天性のレースセンスの持ち主であるマヤノ、かなりいい感じにレースを進めているように見える。

一方でマヤノに絡んでいたあの子はバ群の中で後ろに控えている。ちようど差しのポジション。あの子の脚質は分からないのだけど、思い通りになっていないレースって感じではないっぽい。

1200mは短い。すぐに第3コーナー、第4コーナーに差し掛かって各ウマ娘が我先にと殺到していく。このレースはメイクデビュー、既にペースについていけず後方得手ごたえ悪く力尽きてしまうウマ娘も出る中、マヤノは……あれ。なんか、まずくないか……? 前に行こうとはしてるし全体で見れば悪くない、けど……マヤノより前を走っていたウマ娘の1人よりも明らかに脚色が悪い。

嫌な感じがしつつも最終直線。ここでマヤノに話しかけてた子が鋭い脚を使ってごぼう抜きを見せる! マヤノは……粘ってる。粘ってるけど見せ場もなくじりじりと後退……。悔しいけど、アタシは齒を噛みしめて見るほかなかった。

結局レースは2番人気のなんかすごい香りの子が、粘った先頭ウマ娘に3/4バ身の差をつけて差し切った。マヤノはぎりぎり掲示板を確保した5着だったが、1着の子からは結構離されてしまった。

あの子が観客席に向かって手を振る中、アタシは隣にいるトレーナーに聞く。

「……ねえ。マヤノはなんで負けたの」

「ダートの短距離を使ったからだ」

「……」

悔しそうに言葉を落とすトレーナーに、アタシは何も言うことが出来なかった。

才能はある。努力もした。能力もついてきている。ただ、一つ——脚が十全であれば。芝で長めの距離も走れるくらいに、脚が十全であれば——。

圧倒的一番人気を背負っての敗戦。重い空気の中、アタシとトレーナーはマヤノを迎えに戻った。そこにいたのは……

「なんかおもってたのとちがう!!」

「……あれ? そんなに敗戦のダメージが大きくない?」

「お疲れ、マヤノ」

「あ、トレーナーちゃん! ごめんね、マヤ負けちゃった」

「いいや、大丈夫だ。初めてのレースで掲示板。しかもそれが得意条件ではないときた。」

十分すぎる結果だ」

「でもでも！ 勝てないと大きなレースには出られないんですよ？」

「それはそうだが、まだ焦る時期でもない。出遅れてもG1レースを制した子はたくさ
んいる。それよりも無理をして脚を壊す方が問題だ」

「そっか……トレーナーちゃんの言う通りだね」

「とりあえず、今日はお疲れ様。ゆっくりクールダウンしてくれ」

「うんっ！」

コイツ……なんてスマートにマヤノの頭を撫でるんだ。気持ちよさそーに目を閉じ
て頭を差し出してくるじゃんマヤノ。めっちゃ嬉しそうじゃんマヤノ。くっ。俺の女
に気安く触れるな。その右手ギロチンで切るわ。

「……ねえ、トレーナーちゃん。マヤのわがまま聞いてもらってもいい？」

「ああ、いいぞ」

簡単にマヤノのわがままを承諾するな。

「マヤね。ダートの短距離で一回勝ってみたいの」

「……お？ どうしてだ？」

「今日は残念だったけど、でもなんとなくつかめた？ ってカンジするから。それに、
確かに一番トクイ！ ってコースじゃないんだけど……走るのは、楽しいから！」

笑顔が眩しい。悔しさもあるんだろうけど、それよりもマヤノは……レースを楽しんでいるのだと思っている。ああ、眩しいな。

「そうか。じゃあ、次のレースもそうしよう。マヤノが満足するまでな」

「うん！　ありがとートレーナーちゃんっ！」

……ぐぬぬ。アタシのマヤノが変な男に墮とされていく……！

けれどアイツに暴力を振るうのは何か違うので。

「……むう」

「わあっ……！」

アイツからマヤノを取り返すように後ろから思い切り抱きしめた。平和的解決。

「バ、バブちゃん」

「ん？」

「いたい」

「……ごめん」

へこんだ。

マヤノはその後も未勝利戦で京都レース場のダート1200mを走った。3着↓3着と善戦した後の、小雨降る4戦目。

そこで、マヤノはついに――。

『先頭抜け出したマヤノトツプガン！ 今、ゴールイン！』

――勝利を収めたのだった。

第8話 マヤノと走ったあの子は

マヤノトップガンが初勝利を挙げたほんの少し後。この年の桜花賞はとあるウマ娘に注目が集まっていた。

オグリキャップと同じ出身であるカサマツから殴り込みをかけてきて、前走のフィリーズレビューで物凄い豪脚を披露して勝利したウマ娘である。あのオグリと同じようなキャリアで、あの強さ。得てして人間は雑草魂とかそういうのが好きで、それを体現したようなそのウマ娘が圧倒的な人気にならないはずがなかった。

その裏で……あるウマ娘が闘志を燃やしていた。カサマツ出身でもなければ、名家の生まれでもない……バックボーンがごくごく平凡なウマ娘だった。特徴があるとすれば、彼女からはやけに香水っぽいにおいがするという、レースとは全く関係のないものであった。

そんな彼女に、一人のウマ娘が駆け寄る——（世間から見れば）平々凡々な1勝ウマ娘。マヤノトップガンだった。

「上手く行けば絶対に勝つ。あたしの脚がアイツに負けるわけがない」

「うん。マヤも信じてる。きつと阪神1600mはキミの舞台だと思うんだ。……行け

るよ」

「絶対?」

「絶対」

「……ええ、そうね。ありがとうマヤノ。——さあ、今に見てなさい。下剋上、果たすのよ!」

7番人気、伏兵。注目の外。勝利はあんまり望まれていない。そんな彼女にとって、マヤノが送ったエールがどれほど心強いものだったろう。

瞳に炎を宿したそのウマ娘は、直線に入るや否や、大外から豪快に前に躍り出た。カサマツのウマ娘は前が開かず苦しい展開。しかし、相手は彼女だけではない。凄まじい勢いで猛迫するのは2, 3番人気であった2頭のエリートウマ娘。

「あたしだって女王の権利はあるの! ナメて貰ったら困るんだから!!」

苦しくなりながらも、詰め寄られながらも。

「はああああ——ツ!!」

それを持ち前の気迫と意地で退け——見事、桜の女王の座を射止めた。

「わ、すご……本当に勝っちゃった……!」

桜花賞で勝利を飾ったのは、マヤノのデビュー戦で1着になった、あの香水がすごいウマ娘だった。当然、アタシとマヤノはそのレースを現地で見ていた。

「ね。マヤの言った通りでしょ?」

「うん。……お祝い、行く?」

「もつちろん!」

アタシとマヤノは一緒に彼女のお祝いに行つた。地下バ道でアタシの隣にいたマヤノを見ると、ピンクと白を基調としたフリフリしてる勝負服に身を包んでいる彼女がにこりと笑つて駆け寄ってくる。——汗まみれだというのに香水のにおいが全然劣化してない。というか、汗のにおいがしない。実はなんかすごい技術なんじゃ……?」

「マヤノ。あたし、やったよ。勝てたんだよ。この、あたしの脚で!」

その子は1600mを走り切つた自らの脚をばんばんと叩いた。そういえば、その子も成長痛^エとかで上手く行かずに調整が遅れてデビューが遅くなった、とか言つてたな。トレーナー情報で。きつとアタシが知らない裏で、この子にも色々あつて——そして、自らの脚で下馬評を覆して1着を取れたことに誇りを持つているんだろう。

しかし、マヤノが未勝利で頑張っている間にあつという間に桜花賞ウマ娘になるなんて。きつと元から短距離に適性があつて、ダートもそれなりにこなせた子だったのだろ

う。それでもってマヤノよりも早く脚元の不安がなくなつたからか芝を使つてティアラ路線に参戦できることになり、そして桜花賞を獲れる才能も運もあつたということなのだろう。

同じ境遇で同じデビュー戦を走つた子が、あつという間にG1のタイトルを手にしてしまった。マヤノにとっては結構悔しいんじゃないかな、もしアタシがマヤノだったらめちやくちや悔しいな、と思つてたけど。

「おめでどう！ マヤ、キミが勝つて信じてたよ。ずつと！」

マヤノは素直にその勝利を祝福してしまえるウマ娘だった。

「ありがとう。それじゃあお返しに……とまではいかないかもだけど」

「うん？」

きつと、マヤノとかかわりを持つ人間とかウマ娘は、その純粹さに惹かれて……。

「あなたの活躍を信じてる。今は発揮しきれていないみたいなのだけけど……あなたの持つその実力は、きつと本物だって、あたしは信じてるから」

マヤノを、好きになるんだろうな。

「それと。そのデビュー前のキミも」

「え？ アタシ、ですか？」

「ええ。……何があつても、諦めないことよ」

「え…………？」

……………何で、アタシにそんな言葉を…………？

「それじゃー！」

「……………あ、ちよつと待つてくださ……………行っちゃった……………」

そう言うと、彼女はあつという間に彼女のトレーナーの元へと向かってしまった。何でそんな言葉を言ったのか真意は分からないまま。だけどなぜだかアタシの心に深く刺さる言葉を貰った……………。

「……………バブちゃん？」

「あ。ごめんマヤノ。ちよつと、ぼーつとしちゃつてた」

「ふーん……………何か隠してない？」

マヤノは勘がするどい。そして、一度疑われると大抵逃げられない。

「……………まあ、いいけどね」

あれ？

「いいんだ」

「うん。今知らなくてもそのうち知れると思うし、それに知るときは今じゃないってカ
ンジしたし」

「そ、そうなんだ……………」

何はともあれ助かった……のか……？ でもこの感じ、絶対感づかれてるよね……。ま、とにかく。アタシに何かあるのかはおしえませんが。ってことで。

第9話 マヤノとすごす夏！

スク水最高。

え？ 突然何を言ってるのか、って？ いやだってそりやそうじゃん。スク水最高じゃん。……いや、まあ、アタシも着るけど。

そんなこんなで学力向上させて何とか出れた選抜レースをサクツと終えて無事マヤノと同じチームに所属した後、夏合宿の季節。アタシは……。

『問題！ じゃじゃんっ。天皇賞春は京都レース場の芝3200mで行われ』

ピンポン

『はい早かったバブル！』

「4000m！」ブーッ

『ばか はずれです……』

「酷い言われよう!？」

トレーニング失敗 体力が5回復した

ピンポン

『はいマーベラス答えは!』

「東京レース場の芝2000m!」ピンポンピンポンピン

『正解!』

「マーベラース☆」

(問題文全文:天皇賞春は京都レース場の芝3200mで行われますが、天皇賞秋は東京レース場の芝何mで行われるでしょう?)

……なぜかクイズ合宿を強いられていた。相手はマヤノの同期で現在骨折のリハビリ中であるマーベラスサンデーって子。ケガこそしてしまったものの今の時点でも結構強いとの噂。

実際頭はアタシより強い……ぐっ。

「いや何で海に来てまでクイズやらなきゃいけないのトレーナー!?!」

「賢さが足りてないからな」

「ぐっ」

言い返せない。

「……百歩譲って認めるけど」

「おう」

「何でスク水着てやる必要があるの?」

「それは……外暑いだろ?」

「……まあ」

「水着なら汗かいてもうつとおしくないだろ？ 体操服とかと違って」

「……ええ」

「それにこの後一応走つたりとかするだろ？」

「……それもそうね」

「砂とかで汚れたりすると大変だろ？」

「……まあね」

「それに海に半分くらい浸かって走るというメニューも考えてある。水の抵抗をプラスして負荷をかけつつも、ケガの危険を少なくした非常にいいトレーニングだ。……どうだ？ 納得したか？」

「……はい」

論破された。悔しい。……まあ、でも……。

「あ、バブちゃん！」

「マヤノー！ バブちゃん呼ぶなー！ ……あ」

スク水を着たマヤノの健康的かつ普段表に出ない官能的で未発達な曲線美が真夏の太陽に照らされる様はそれはそれはもう天下に轟く芸術品とっていいほどにめっちゃくちはちやめちやどつちやどつちやに綺麗であり。

「しゅきい……」

「うわわわ!? どしたの急にへたりこんで!? 熱中症!?!」

「ちが……いや、あるいみ、そうかも……ばたり」

「うわあああ!? バブちゃんが生んだあああつ!?!」

あんまりにも尊すぎてしあわせを感じながら意識をぱーっと手放していたのであった。

「はあ……だめむりとうとい……バタリ」

後で聞いた話によるとなんかもう一人ウマ娘が倒れていたらしいが詳細不明である。

「……というところで、夏予定していたデビューは見送って秋にする」

「そんなー!?!」

さっきの感じで熱中症で倒れることが頻発したので大事を取ってデビューを延期されました。なんでや。

「さすがにレース中に倒れられたら困るから……涼しくなっただけからデビューしような」

いや全然大丈夫ですただ単にマヤノが素敵すぎてそれで体温が上がって……って言う間違いなく頭おかしい扱いはされるので言えない。今更な感じもしなくもないけど、開き直って変態になるのとギリギリを保って隠し通すのでは変態度は雲泥の差でしょ。ね？ そうだよ……ね……？

「マヤノおとおお……」

「よしよし、元氣だしてー」

「まやのままああああ……」

……あれ？ アタシ隠してなくね？

「さて。マヤノだが……脚の調子、だいぶ良さそうだな？」

「うん！ 身体がすっごく軽くてね、まだまだ走り足りないんだー！」

マヤノはダート未勝利を勝った後もレースにコンスタントに出て好走と勝利を繰り返しており、つい最近2000mの舞台で芝コースデビューも果たした。結果は3着だったものの、レース後の脚の様子も大丈夫だとのこと……ようやく適正な距離とレースで走れる身体が出来上がってきたのだ。マヤノのトウインクル・シリーズはここからが本番といったところ。

「そこでだ。調子がいいうちに、レースを1個使っておこうと思う」

「レース！」

「合宿中だが、調子がいいこの機を逃すわけにはいかない。それに、結果が良ければクラシックの最後の一冠……菊花賞に間に合うかもしれない」

「菊花賞!」

菊花賞。クラシック三冠の三冠目、つまり最後のレース。3000mという長い長い距離を走る、『最も強いウマ娘が勝つ』と言われているG1レースである。当然、勝てばこの上ない名誉を手にするとともに、以降トウインクル・シリーズの一線級にて戦っていくけるということでもある。

そんな菊花賞に、上手く行けば出られるかもしれない。マヤノがそんなチャンスを逃すわけもなく。

「どうだ? レース、出てみないか」

「アイ・コピー!」

やる気満々。マヤノはビシツと敬礼を決めてみせた。

……で、マヤノはこのレースを勝つんだ。直線に入って2番手、そこから1番手を走っていたウマ娘の横にピタリと付けて、100m付近に差し掛かるとそのままするつと交わして1バ身突き放す。見る人みんなに「これは強い」と思わせるような文句のつけようがないレース運び。マヤノの時代が始まったと言ってもいいくらいに美しい勝

利だった。

「マヤノ。次は少し休んでから神戸新聞杯を使おうと思う」

「えっと、このレースって、確か菊花賞の前哨戦トライアルだよね？　ってことは……」

「そうだ。……いよいよクラシック級の本線に乗り込むぞ」

「……うんっ」

マヤノはトレーナーの言葉に強気に口端を上げ、力強くうなずいてみせた。夏の上がりウマ娘の筆頭として、ついに最前線へ名乗りを上げることになる。当事者でないアタシも気持ちが高揚していくのがはつきりと分かった。

さあ、こっから面白くなってくるぞ……！

第10話 マヤノ、いざ前哨戦へ!

秋中旬。菊花賞の前哨戦^{トライアル}。神戸新聞杯、G2。京都芝2000mで行われる。ここを3着以内でゴールすれば、よほどのことがなければ菊花賞に出走が出来るというレースだ。

また、文字通り菊花賞の前哨戦ということで、ここを勝たなくても菊花賞に出られるような実績を持つ、春に皐月賞やダービーを走っていたウマ娘が出走することも往々にしてある。というかほとんど出てくる。

実際、今年のダービーウマ娘がここに出てきている。他に実績の目立ったウマ娘がないこともあってか、断然の1番人気に推されていた。が……当の本人はあまりにも異様なオーラを発していて非常に近寄りがたい感じがした。まるで闇落ちにも近いような。

ここでちよつとこの年のクラシック戦線を振り返ってみよつか。実は去年マヤノと一緒に見ていた朝日杯を勝ったウマ娘は、「不治の病」とも言われるほどの重病である屈腱炎によりクラシック全休を余儀なくされている。

……まあ、ぶつちやけると我らが寮長フジキセキ先輩なんだけど。フジ先輩曰く、

『リハビリもするけれど、後輩たちの面倒もたくさん見てやりたいという気持ちもある。もちろんターフには戻りたいけれども、その時戻る舞台がトゥインクル・シリーズかどうかは分からないね』

……とのコメントを残しており、今後マヤノとフジ先輩がこのトゥインクル・シリーズで戦うかどうかは限りなく不透明である。

それはともかく。この世代はあんまりにも強かったフジ先輩が同期だったのが限りなく悪運だったのだ。特に大きな煽りを受けたのがダービーウマ娘。フジ先輩がいれば負けていたのだの、テイアラ路線のオークスより勝ちタイムが遅いと煽られ、しまいはそのオークスウマ娘がフランスから帰ってきたら菊花賞に出ます、と……。

まあ、残念ながら本人の実力も影響しているところもあるのかもしれないけれども、なんというか、あんまりにも可哀そうだね……。だけど変な上っ面だけの同情ほど嫌なものはないだろう。放っておくのが一番だと思う……と信じたい。

「私は強い。私は強い。私は強いんだから……」

そうやってぶつくさど何かにとりつかれたようにつぶやき続ける、異様すぎるダービーウマ娘を横目に見つつ、地下バ道でマヤノと一緒にいると……ある一人のウマ娘が気さくに声を掛けてきた。

「よし」

「あ、スリリンちゃん!」

あの子は確か……前走マヤノと走って2着だった子だ。負けはしたものの、逃げ粘つての2着で、なおかつマヤノとは1バ身差なのにもかかわらず後続とは差を十分につけた2着だった。実力はハッキリと抜けている。……にしても、中々に元氣つ子だなあ。

実はそんな彼女もデビューがマヤノよりもっともっと遅れたそう。4月の下旬……つまりマヤノが初勝利を挙げたときよりもはるかに遅く、もつと言えば皐月賞すら終わつたあとである。

「へっへーん! あの後もつかいレース使つて逃げ勝つたからな。とうとう……とうとうウチも乗れたんだ、この路線にな……っ!」

そう語るその子は心底嬉しそうに話す。そりゃあ嬉しいだろう。春夏我慢して、ようやく条件が揃つて最前線で戦うチャンスを手に入れたのだ。ジュニア級からクラシック級の春にかけて苦しんでいたマヤノを間近で見ていたアタシには分かる。

そして、そんな苦労人の彼女の實力を認めたくえで応援する声も大きかった。今回の2番人気ウマ娘はこの子だ。……というか、前走がシニア級のウマ娘混じりのレースで3バ身差の逃げ切りっていう結構派手なことをやってるんでこの人気もうなずける。1番人気とかなりの差を付けられているが、実績が実績だから仕方がない。

「上がりウマ娘同士、刺激的な時間を愉しもうぜっ!」

「うんっ！」

そんな彼女が差し出した拳に、マヤノも拳を作ってこつんつ、とぶつけあった。

「何だかかっこいいね、それ！」

「だろ！ ウチとトレーナーのレース前のルーティーン。これをやると気合が入ってスリリングに逃げ切るぞー！ ってなるんだよつ。……勢いあまって気合、ライバルにおすそ分けしちまったな。ははっ」

……この子、なんか裏表ない感じで好きになりそうだなー。てか友達多そう。

—京都レース場 神戸新聞杯（G2） 芝2000m 14人立て—

8 枠14番 マヤノトップガン 5番人気

4 枠5番 ダービーウマ娘 圧倒的1番人気

3 枠4番 刺激的な時間を愉しむ逃げウマ娘 2番人気

今回マヤノトップガンは大外枠。一応中団から行くレースをしたことのあるものの、今までのレースのほとんどが逃げに近い先行のレースをしているマヤノ。外枠だからちよつと先行は不利なんだけど……どう出るんだろうか。

それに、このレースは重賞だ。ダービーウマ娘を初めとして、相手関係は一気に強化

されている。いくら脚元に不安が消えたマヤノとはいえ、一筋縄ではいかなさそうだ……!

ゲートが開いた。マヤノはあんまりいいスタートとは言えない。その上少し外によれてしまった。それでもぐつと加速してやや強引めではあるものの3番手につける。

やや飛ばし気味な先頭のウマ娘を見ながら、刺激的な時間のウマ娘は冷静に2番手に控える。どうやら逃げ一辺倒ではないらしく、展開次第で先行策も取れるウマ娘と見た。あんな感じだから何が何でも逃げるって感じに見えたけど、意外と柔軟性があるっぽい。

そして、圧倒的一番人気を背負ったダービーウマ娘さんはかなり後方からレースを進めている。元々差しのウマ娘であるから後方から行くのは彼女の形だ。

第3コーナーで早くも飛ばしていたウマ娘が力尽き、ずるずると後退を始める。それを合図にしてか周りのペースがぐんつと上がり、緊張の糸がピンと張り詰めるのを感じた。ここが仕掛けどころだ、みんながみんな脚をじわじわと使って速度を上げに掛かる。

先頭は押し出された刺激的ウマ娘。マヤノは2番手。そして、後ろから恐ろしいオーラをまとったダービーウマ娘がじわり、じわりと存在感を醸し出し、機をうかがっている。圧倒的一番人気のダービーウマ娘。実力をどうしても証明しなければならない運

命にあるウマ娘。いくら前哨戦であろうとも、絶対に負ける訳にはいかないだろう。覚悟が違う……！

各ウマ娘最終コーナーをまわった。ロスなく内内通って刺激的ウマ娘が先頭で直線に入る！ マヤノは二番手をキープしたままスパートをかけたように見えるが、さすがは前走シニアのウマ娘相手に3バ身差で逃げ切ったウマ娘、内で粘る粘る、粘り続ける！ さらに外からは気迫のこもった末脚でダービーウマ娘が芝を蹴飛ばしながら物凄い勢いで迫りくる！

が、しかし。ダービーウマ娘、最初こそ鋭い脚を繰り出し伸びたものの、何か物足りない。残り200。とうとう内で粘っていた刺激的ウマ娘を競り落としてマヤノが前に出たが、ダービーウマ娘は伸びを欠いてしんどそうに走っている……！

「行ける！ 行けるよマヤノっ!!」

アタシの声が届いたのか、マヤノがにやりと笑ってさらにギアが上がった気がする。他のウマ娘たちには悪いが、きつとこれはマヤノのレースだ。マヤノが絶対に勝つ！ 残り100を切って1バ身ちよつとのリード。もはや誰もがマヤノの勝利を確信した。当然のごとく、そのままマヤノが先頭でゴール板を……！

「なっ……！」

外からとんでもない勢いで突き差さんと追い込んでくるウマ娘、あれは……カサマツ

からのウマ娘だ! 完全にノーマークだった! それだけじゃない、残り1000mの時点でここだと言わんばかりに絶好の仕掛けを見せたウマ娘がバ群からグイン! と伸びてくる……! 彼女も完全にノーマークだ!?

これが重賞。これが最前線のレベル。残り1000mで、結果はひっくり返った。

マヤノは2着。1着は、バ群から伸びてきたウマ娘。わずかにクビ差、ギリギリで重賞制覇をかつさらわれてしまった。

第11話 マヤノにスリリングな提案を

今のは明らかにマヤノが勝つレースだった。のにもかかわらずだ、マヤノが負けた。負けてしまったのだ。一瞬のスキをついた差し脚によつて。

マヤノが呆然と掲示板を眺めるのが見えた。そして、1着を獲ったウマ娘は……ゴールを通過した途端、力尽きるようにばかりと芝に倒れこみ——天に拳を突き出してみせた。

そして、人気を裏切ってしまったダービーウマ娘。……一体何を思うのだろう、掲示板すら見ずに、ただ地面を見つめながらゆっくりと走っている。彼女は5着だった。

このレースはあくまでも菊花賞の前哨戦。多くのウマ娘にとつては、ここを勝つてはい終わり、というわけではない。ここ『も』勝つて、菊花賞は『絶対に勝つ』。そんな気概で挑むレースである。今回集まったメンツが春夏であまり実績を残せておらず、菊花賞に出れるかどうか分からないウマ娘が多かったのも、こんなにも白熱した要因の一つであろう。今後のためには絶対に、絶対に落とせないレースであったから。

たった一つのレースで明暗がはっきりと分かれる。これが、トウインクル・シリーズの最前線。アタシはシビアな世界を目の当たりにし、しばし硬直してしまった。

―神戸新聞杯 結果―

1着 バ群から抜け出し、天に拳を掲げたウマ娘 7番人気

2着 マヤノトップガン 5番人気

3着 カサマツから夢を掴みに来たウマ娘 8番人気

※ここまで菊花賞の優先出走権獲得

4着 刺激的な時間を愉しむウマ娘 2番人気

5着 ダービーウマ娘 1番人気

「マヤノ、お疲れ様ー！」

アタシは地下バ道に向かい、真っ先にマヤノに声を掛けた。確かに負けのショックはあるが、初重賞挑戦で2着を確保して見事に菊花賞への優先出走権を手に入れたのだ。当然、褒めてしかるべき成績だろう。

「バブちゃん！ すっごく惜しかったよー！」

マヤノは若干の悔しさをにじませながらも、それでもすっごく楽しそうな感じであった。しっぽめっっちゃブンブンしてる。可愛すぎか。

「勝った！ って思ったら後ろからすっごい勢いですがーん！ ってやられちゃったん

だもん。マヤ、最後まで全力で走ったつもりだったんだけど、それでも負けちゃったんだ！」

「勝利を目の前で奪われたにしては、やけに嬉しそうだね……？」

「うん！ 何だろう、すつごくワクワクするってカンジなんだ！ これからもあんなすごいレースができるっていうことに、すつごくすつごくワクワクしてる！」

「……それでこそマヤノだ！」

なんだかこつちも嬉しくなつてついマヤノの頭を激しくわしゃわしゃーつてしてしまつた。マヤノも目をぎゅーつてつぶつて嬉しそうにわしゃられてる。かわいい。

「くーっ！ あと少しだったな……！」

爽やかに声を掛けてくるウマ娘。たしかあの子は……レース前にマヤノと話してたウマ娘だ。彼女は惜しくも4着に終わり、優先出走権獲得には至らなかつた。

「あ、スリリンちゃん！ おつかれさま！」

「おー、おつかれー！ そんなで……マヤノ、菊花賞出走権獲得おめでとう！」

「ありがとー!!」

それなのにマヤノを気持ちよく祝福してくれる。なんていい子なんだこの子。本当は負けて悔しいはずなのに。

「スリリンちゃんは……惜しかったね」

「めっちゃめっちゃ悔しい！ 正直最後まですっごく上手くいったと思つたもんな！ でもよ、前走つた時みたいにマヤノにぴったり競られるわ後ろからもすごい飛んでくるわで、もー、みんなつえー！ 超スリリングー！ って思つたな！ あははは！」

豪快に笑い飛ばすその両目に、わずかに涙が浮かんでいたことにアタシは気づく。アタシが気づくことにはマヤノも当然気づく。

「スリリンちゃん」

「お？ なんだ？」

「マヤね、スリリンちゃんともつかい走れてすっごく楽しかったの」

「あはは、言ってくれるじゃんか」

「だから、ありがと！」

「……お、おう！ どういたしまして！」

けれど、真剣勝負で謝るとか、同情するとか、そんなのは違うんだ。だからマヤノは、感謝を伝えた。あの時、アタシとマッチレースした時のように。

刺激的ウマ娘は、軽く目をぬぐって深呼吸したあと、何かを決心したかのように言葉を吐いた。

「……あのさ」

「うん？」

「多分ウチ、もう一回トライアルに出ると思う。京都新聞杯、だいたい今から一か月後のレースな」

「うん」

「そこでだ。マヤノももう一回走らないか？ トライアル」

「え……？」

マヤノは既に菊花賞への優先出走権を獲得しており、菊花賞に出るだけならトライアルに二度出走する必要はどこにもない。それに今回の2着でファン数もおそらくそれなりに増えており、他のG1は分からないがG2やG3であれば出走するに難くない人気をマヤノは持っているはずだ。

それに、夏にもマヤノは走っている。既にそれなりの数マヤノはレースを使っているのだ。今日が激戦だったのもあって、身体に蓄積している疲労の面でも心配だ。いくら脚に不安が消えたからといっても、である。

それに。

「それ、もしマヤが3着以内に入ったら、優先出走権を一つ潰しちゃうんだよ？」

既に優先出走権を持つマヤノが3着以内に入ろうが、4着のウマ娘に優先出走権が回ってくるなんてことはない。あくまでも3着に入らなければ優先出走権は得られないのだ。

「ウチはそれでもいい。ウチだけじゃない、出てくるウマ娘みんなそう思うはずだよ。ここで優先出走権を潰されて負けるのであれば、もし菊花賞に出れたとしてもきつといい結果にはならない——つてき」

「スリリンちゃん……」

そして、迷いなくその子は言い切る。

「それに。挑む舞台はなるべくスリリングでなくちゃね！」

ああ、すごいウマ娘だなあ。アタシはつくづくそう思ったのだった。

けれど。マヤノは……。

「……どう、しよう」

当たり前だ。悩まないはずがない。せめてアタシが、マヤノの悩みを聞ければいいのだけど……。

第12話 マヤノがかわいい定期

激戦を終え、菊花賞への優先出走権を得たマヤノ。ウイニングライブも（センターはマヤノじゃなかったけど）につっこここで堪能して、アタシたちの部屋に戻れば一気に日常に引き戻される。

「バブちゃん」

「んー？」

今日はマヤノが甘えたがりらしい。アタシがスマホをいじって今日のレースについて色々反響を見ていたら、マヤノが後ろからぎゅーって乗っかってきた。おろしたオレングシ色の長い髪からフローラルないにおいがして、何か一気にしあわせのスイッチが入った。

スマホどころじゃない。アタシはスマホを置いてマヤノに注目した。

「……マヤはさ。どうすべきなのかな」

「どうすべきって……京都新聞杯、だっけ」

「うん」

4着になり優先出走権をギリギリ逃した友人から、レース直後に貰った提案。もう一

度トライアルに出て一緒に走ってくれないか、という提案だ。トレーナーは出てもいいし出なくてもいい、ただ無茶だけはするな、と。結局、マヤノ次第なんだ。

ただ、当のマヤノは悩んでいる様子だった。そりやそうだ。自分は優先出走権を得ていて出る必要性があんまりないのだから。

「……………んー。難しいよね」

アタシは無責任に答えることなんて出来ない。正直なところ「出ればいいじゃん、だってそのままでも菊花賞に出れるダービーウマ娘も、叩き台としてこのレースに出たし」なんだけど……………やっぱり当事者じゃないから。本当の気持ちは分からないんだ。「バブちゃんが後押ししてくれたら、マヤはそうする」

「ん……………」

頬をぴとりと合わせてくるマヤノ。声が近すぎてくすぐりたい。……………でも、それはちよつとまずいんじゃないかな。アタシだけの意見に左右されるのは、マヤノのためにならない。

「色々聞いてみる。他の子に」

「他の子に？」

だから、アタシはそうする、かな。

「うん。アタシ、やっぱ当事者じゃないし。アタシだけの意見でとやかく言うのは、やつ

ば違うと思うんだ」

「バブちゃん……」

「だから、他の子に色々聞いてみる。そうすればアタシだけの意見じゃなくなる。マヤノもきつと、もつと納得できる。それでいい？」

「うん。マヤも相談してみるね。色んな子に」

「ん」

まだ解決はしていない。けれども心の荷はきつと軽くなったはず。悩みは二人ではんぶんこ。だってマヤノと一番近くにいるウマ娘だもん。

「ねえ。バブちゃん」

「ん？」

「今日、一緒のベッドで寝よ？」

「……ん。いいよ」

アタシはにこりと微笑んで、マヤノの頭を優しく撫でてあげた。やっぱりこの子、かわい。当たり前だけど。

「で、二人揃って遅刻、と」

「ネイチヤせんせーごめんなさーい」

「反省の色なしっ……!」

翌日。マヤノがアタシを抱き枕にしたらご覧のありさまでした。

マヤノはレースの疲れもあつて超ぐっすり。アタシはマヤノに内心で限界になつて中々寝付けず。そりやそうなる。

「でさ。単刀直入なんだけど」

「おお、急だねバブル？」

「聞くよ？ 優先出走権を貰つたウマ娘がもう一回トライアルに出るのはありますか」

「ふーむ」

ネイチヤはしばし考えて。

「別にありじゃない？」

と、当たり前のように答えた。

「だって皐月賞とかダービーを勝つたウマ娘もフツーに出るレースじゃん？ だから別に関係ないと思うよ、優先出走権持つてるか持つてないかってさ。深く考えなくてもいいと思う」

だいたいアタシと同じ意見だった。

「……てかマヤノ」

「ん？」

「脚、大丈夫なの？ 結構レース走ってるでしょ」

「脚？ 大丈夫だよ？ ほら。たったたったーん！」

マヤノはその場でもも上げをした。かわいい。あ、肝心の動きもぎこちない感じはないので大丈夫だと思う。

「……大丈夫そうだね」

「うん！ 大丈夫だよ？」

ネイチャははしゃぐマヤノをみて、ふふつと笑ってみせた。

その後色んな子に聞いてみたけど、大半がネイチャと同じような意見だった。別に出ちやいけないなんて規則はない、どうせ菊花賞でぶつかる、連続出走は連続出走なりのリスクがある……中にはトウインクル・シリーズに情けなど無用である、なんて過激派な意見も飛び出した。

トレーナー室。

「マヤノが行くと言えば京都新聞杯に登録をするし、行かないと言えば菊花賞までじつくり仕上げていく。任せるよ、マヤノ」

アタシと一緒に数々の意見を聞いたマヤノ。レース直後に、ライバルにもう一度一緒に走って欲しいとのお願いをされた。脚も全然問題ない。まあ、今日は遅刻したけど……それはそれ。

決断をゆだねるトレーナーに対して、マヤノは自信を持って。

「マヤは、京都新聞杯に行きたい。……ううん、京都新聞杯に行く。マヤ、もう決めちゃったもん」

そう、はつきりと言つてのけた。

「分かった。それじゃあ登録しておくからな」

「忘れたらダメだよ、トレーナーちゃん！」

……何か登録を忘れそうな顔してる。釘差しておこう。

「アンタさ、もし忘れたら……」

蹄鉄付きのシューズを喉元に、当たるか当たらないかくらいの距離まで突き出した。

「蹴るよ」

「ひえっ」

「これでよし。」

第13話 マヤノ「おもってたのとちがーう!!」

マヤノのレースがある一週間前、アタシのメイクデビューがあった。人気こそ背負ったけれど、なんか上手く行かなくて3着だった。

……次こそは、勝つ。今月中にもう一回折り返しのメイクデビューに出て、勝ってやる。早くマヤノに追いつくために。

神戸新聞杯からおよそ一か月後にある京都新聞杯。京都2200mで行われる菊花賞の前哨戦の一つ。

既に優先出走権を得ていて、別にこのレースに出なくてもよかつたマヤノだったんだけど……ライバルから『レースに出て欲しい、そうしてくれるとウチも燃える（要約）』的なことを言われ、出走することにした。

特段勝たなくても菊花賞への出走には何ら影響のないレース。でも、少なくとも見ているアタシからしたらマヤノは一切手を抜かずに頑張って走ったと思ってる。

……しかし。

「おもってたのとちがーう!!」

しかし、残念ながらここでもマヤノは2着どまりだった。早くに仕掛けて飛び出したウマ娘を懸命に追い詰めはしたものの、あと少しの差が埋まらなかったのだ。

が、マヤノが言う「おもってたのとちがう」理由は他にもあって。

「マヤノ! ごめん! ウチ、めっちゃ不甲斐なかった……!」

「スリリンちゃん……」

マヤノにこのレースに出るよう約束をしたウマ娘が直線に大失速して2桁着順に沈み、優先出走権を最後まで獲得できなかったということだ。

「マヤノが出るって言うってくれて、ウチ、めっちゃ頑張ったんよ! 絶対優先出走権を獲得して、菊花賞一緒に走って、そんでもって絶対勝つって思ってた! でも、でも……あはは、ダメだった……」

そう、自らの悔しさをごまかすように笑って話すウマ娘は今も少しふらついている。脚元を見れば時折芯を失ったかのようにぶるつと震えており、脚としての機能を失いかけているよう。アタシは心配になって肩を貸した。

「大丈夫? 立てる……?」

「ありがと。あはは、ごめんな……」

多分、この子は……頑張りすぎてしまったんだろう。事実マヤノが出るといふことを彼女が聞いた際には発奮して、その後のトレーニングをたくさん頑張っているのを見た。

ただ。4月後半のデビューから同期に追いつくために休みなくレースに出て走り続けた上に、前前走がシニア級相手に3バ身の逃げ切りという派手なパフォーマンス、さらに前走の神戸新聞杯も中々の激戦だったがために……彼女自身も感じていなかった疲労が蓄積されていき、このレースの最終直線でどつと表面に出てしまったんだろう。

そして、トドメに前走からの200mの距離延長。逃げウマ娘にとって追いつかないようにしなければいけない距離が増えるというのは、単純ながら想像以上にしんどいのなのだ。

この世界は優しくない。全てのエピソードが全てグッドエンドに収まる世界じゃない。この世界のシビアさをつい最近のレースでまざまざと見せつけられたアタシだったけれど……今、こうして、生で、目の前で直面して……少し、こわくなった。

でも、既にそのステージに上がっている二人は堂々としていた。

「……マヤノ。ウチらしくない、ふっつーなセリフだけど……菊花賞。絶対勝つてね」
「うんっ」

「ウチ、出直してくるよ。そんなもって、またマヤノと走れるようになる。それまで待つ

てて」

「分かった」

マヤノは握りこぶしを作って、彼女の前に小さく突き出した。

「マヤノ……!」

「もう1回、このトウインクル・シリーズでマヤと走る。約束だよ」

「ああ」

「ユー・コピール?」

マヤノの問いに、彼女はギュツと決意を込めて握りこぶしを作り、マヤノのそれと合
わせた。

「アイ・コピール」

その目は真っ直ぐマヤノを射抜いていた。

その後、彼女のトレーナーが来て、そこから聞いた話だけど……彼女は次のレース、一
旦クラスを落として短い距離で立て直しを図るらしい。そうしてから無理をさせずに
徐々にステップアップしていくとのことだ。

もし今後彼女が最前線に舞い戻ったとして、マヤノと一緒に走るのならば天皇賞・秋
辺りが目標になるらしい。最短でも今から1年後の未来だけれど……。

「アタシさ。あなたとマヤノと一緒に走る未来、信じてるから」

「お。せっかくだからお前も一緒に走らないか？」

「え？」

「だって来年にはクラシック級だろ？ 秋天、出れるぜ」

「……あ、そっか」

そうか。来年のこの時期アタシは。

「ふふん。バブちゃん、もうマヤに挑んじゃうの？」

……マヤノと、走ってしまう未来があるかもしれないんだ。先週のメイクデビューで3着止まりだったアタシが、その未来に行けるかはまだ分からないけれど。

「……挑むよ。そのチャンスが来たら」

出まかせの言葉かもかもしれない。でも、アタシの覚悟は、本物だ。

菊花賞まで、あと一か月。

第14話 マヤノに勝負服が届きました

今日、マヤノは他のチームの子と一緒に走っていた。わずかに前に行くのはマヤノ、二番手追走はスリリン。そこから少し間を空けて走るのは、桜花賞を勝ったあのやたらと香水がすごい先輩ウマ娘。

香水の先輩がギアを上げて上がっていく。マヤノがほんの少しひきつけてからぐつと仕掛ける。スリリンもそれに呼応して粘り込みを図る。

しかしスリリンにとつては分が悪い相手だったのかある地点を境に後退を始めてしまい、香水の先輩がスリリンを並ぶ間もなく追い抜いてマヤノに追いつこうと差を詰め始めたところがゴール板だった。

「……強くなつたじゃない、マヤノ」

「ワンちゃん!」

「その呼び方はやめなさいって……」

マヤノは香水の先輩をそう呼んでるのか……まあ、名前から取っているっちゃいるんだけど。

「そりゃトーゼンだよ? だってマヤはオトナのオンナに近づいているんだからね!」

「立ち振る舞いはともかくとして、実力はメイクデビューのときよりはるかに強くなっている。芝で走ってるって点もあるのかもしれないけれど……」

「むうううー。立ち振る舞いもちゃんとオトナっぽくなってるもん！」

『オトナのオンナ』は駄々をこねないと思うの」

そこに息を切らせたスリリンがやってくる。

「はあ、はあ……二人とも速えな、やつぱー！」

「そりゃああたしは曲がりなりにもGーウマ娘だもの。あなたに負けるわけにはいかないの」

「マヤに負けてるけどね」

「なっ……マヤノおおおお！」

香水の先輩がぎゃーぎゃー言いながらマヤノを追っかける。苦笑いしながら、アタシと同じようにあはは……と笑う一人残されたスリリンに近づく。

「スリリン。ドリンク飲む？」

「お、さんきゅ。……あんなこと言っておきながら、あいつも『オトナのオンナ』には程遠いな」

「あはは。ま、それアタシたちもそうだけど」

「だなー。特にウチなんか大人になってもずっとこのままだろうな。色気皆無。彼氏も

皆無。つてな！ あははははー！」

豪快に笑い飛ばすスリリン。色気皆無、とか言っておきながら、以前ちらつと見せてもらった彼女の勝負服デザインだスリリンが作ったいふ際どかつた印象があるんだけど。ただでさえ胸大きいし。

勝負服？ 勝負服……あつ。

「……そういえば」

「ん？」

「マヤノの勝負服、今日じゃん」

「おおおお！ どんなのになるんだろう……！」

「絶対可愛いに決まってるはあはあ」

「バブルの目がガチだ。これはガチだこわい」

間もなくトレーナーがマヤノを呼んで、勝負服の試着と試走が行われる。どんな感じになるんだろう。まあ、可愛いのは確定なんだろうけど！ ……しないように心の準備を……。

あ、出てきた。元気いっぱいに登場してきたその姿は……。

「マヤちゃん、ランディング☆」

……ねえ。

ねえねえねえねえねえ。

「ちよつとつとつとつとアンタ」

清纯なマヤノであるのにもかかわらずお腹出しすぎである……ッ！ 確にかわいい。確にかわいいが。ゆるせねえよなあ？

ということでアタシはトレーナーを軽くぶつ飛ばすことにした。

「マヤノになんてカツコさせてるのおおお……!!」

「ちよ、ちよつとまってバブちゃん落ち着いてー!!」

が。ほかならぬマヤノに制止を食らったので落ち着いた。

「……これ、マヤノが考えたの!?!」

「うん。ちよつと恥ずかしいけど……オトナのオンナに近づきたくってダイタンになっちゃった」

なるほど。なら納得した。マヤノの願いが込められてるならヨシ。……いや、アタシ的には、もーちよい自分を大切にしてほしい感はあるんだけどね？ それを口に出したらいよいよ厄介後方保護者になってしまう。

それに一旦落ち着いてよく見れば……確かに、まあたーしーかーにー、露出はちよつとばかり必要以上だとは思いますが、マヤノの着てるそれは人間の女子陸上選手が着てるそれだし（なんならアタシも前世で着てたやつ）。……まあ丈が短すぎるとは思うが。

あと、なんだかんだそんなにいやらしさは感じないんだよね。というかむしろ元気さの方が目立つ。お腹の露出もえっちというよりかは健康的じゃんキュートじゃんって印象の方が勝つ感じ。それにフライトジャケット、って言うんだっけ？ それを大胆に羽織るっていう豪快さ。うん。実にマヤノらしい。天才だ。……本人的にはもつと色気があってオトナっぽい、だとかそういう感想の方を欲しがりそうではあるけど。

……と、脳内で魅力を語りつくしはしたのだが。

「可愛い」

口から出る言葉はたったの3文字しかなかった。

「ホント!?!」

「うん。そりゃあもう最高に可愛い。天才的に可愛い」

マヤノは褒められて上機嫌。腕を飛行機のように真横に広げ、アタシの周りを旋回飛行。可愛い。

でもって、何となくだけど動きも軽そうである。フライトジャケットのすそが忙しくはためくのが一見邪魔に思えそうだが、案外そうでもないのだろうとウマ娘たるアタシには何となく分かってしまう。

果たしてそれはホントだったらしい。勝負服を着ての試走としてマヤノが菊花賞と同じ3000mを軽く走ったけれど（トレーナーは1000mでいいと言ったけどマヤ

ノが聞かなかつた)、3000走つてもまだまだ行けるよー! 　　つて感じに元氣満々。軽くでありながら3000を流してこの元氣。すごいなー……と見ていたアタシとスリリン、勝負服を着たことのないウマ娘2人は感心を隠せなかつた。

一方でウンウンと頷く香水の先輩。彼女はG1レース経験済みであるため、勝負服の感覚も当然知つている。アタシは聞いてみることにする。

「えつと……勝負服つて、やっぱこうなるものなのですか?」

「ええ。不思議なのよねー、着るだけで気持ちがあたかぶつてきて、力もみなぎつてきて……今あたしが一番強い! 　　つて氣になつちやうんだもん。たとえ人氣が他の子に比べて全然なくつても、勝つのはあたしだ! 　　つて気持ちになれる」

　　こう語る香水の先輩は何だか嬉しそうだ。そして何だかうずうずしているようにも見える。まさかこの人……。

「マヤノーっ! 　　あたしも走るー!!」

　　やっぱり。びゆんとアタシの隣から消えたと思つたら、香水の先輩は一瞬にして勝負服に着替えてコース入りしてた。

「あたしも!! 　　3000走るぞーっ!」

「先輩、それ無謀では……」

「なーに、マヤノが行けたんだし! 　　2400も踏破済みなあたしなら楽勝だつて!」

オークス取った子も出るっていうし……！」

そのまま勢いよく駆け出した先輩。横でスリリンがぼつり言う。

「……掛かっているね、こりゃ」

「だねえ」

遠い目で同意しておいた。……そして案の定。

「ぜえ……はあ……ひいい……むりい……」

香水の先輩は2200の地点ですでに手ごたえが怪しくなり、2600を過ぎたあたりでほぼほ歩いていた。いくら勝負服でも適性を覆すなんて芸当はできないらしい。……逆に言えば3000を難なく走り切ってしまったマヤノは、その適性が元からあるということ。つまり、菊花賞は十分期待が出来るはずだ。

しかし、この小さな身体はどこにこんなスタミナが秘められているのだろう。

「見栄張るんじゃないかった……大人しくエリ女の練習しとく……バタリ」

その後みんなで香水の先輩の面倒を見てやったのは言うまでもない。トレーナーが手際よく応急処置をするのにちよつとカッコよかったと思ってしまったのは絶対秘密だ。死んでも言えない。

第15話 マヤノ、最強の称号を求めて

菊花賞。クラシック三冠の最終戦。「最も強いウマ娘が勝つ」と、何度も何度も言われ続けてきたレース。

それもそのはず、舞台は京都レース場。距離はダービーから600mも伸びた3000m。第3コーナーにある『淀の坂』を二度上り、そして下る必要がある。下った勢いそのままに第4コーナーから直線へ突入、あとに待ち受けるものは平坦な直線のみ。3000mを走る最後の最後に、小細工なしの高速スピード勝負を求められる過酷なコース。

そうである以上、勝つウマ娘は当然のごとく『最強』の称号を得る。

そんな舞台に、これからマヤノトップガンが挑む。

「……どしたのバブちゃん？ マヤの髪に何かついてる？」

「あ、いや……可愛いなって」

「あ……えへへ……マヤがカワイイか……♪」

……まあ、元々マヤノは可愛さに関しては最強なのだけでも。控室にて勝負服もばっちり着こなしているマヤノに、アタシはだらしくふにやふになりながら見と

れていた。スリリンが呆れたように笑うけど気にしない。だってあんなに可愛いのが悪い。

「あははは、バブルは相変わらずだな……」

「だって可愛いものは可愛いでしょうよ」

「まあ、それは認める。マヤノの勝負服めっちゃいいよな」

「でしょー!」

「……じゃなくて! 勝負服の話も大事だけど……」

マヤノの可愛さに飲まれそうになったのか、スリリンは勝負服の話題から逃げるように首をぶんつと横に振ってマヤノに近づく。

「マヤノ! 今日の菊花賞……絶対に、絶対に! 絶対に勝ってきてよ!!」

「うん!」

「……ユー・コピー?」

叶わなかった菊花賞出走。スリリンがありったけの想いを込めたであろうにぎり拳をぐつと作る。マヤノも迷わず、拳を突き出して……

「アイ・コピー!!」

元気いっぱい拳を突き合わせた。

—京都レース場 菊花賞（G1） 芝3000m 18人立て—

5枠10番 マヤノトップガン 3番人気

2枠4番 フランスから帰ってきたオークスウマ娘 1番人気

6枠12番 前走 京都新聞杯を勝ったウマ娘 2番人気

8枠16番 ダービーウマ娘 5番人気

ダービーウマ娘が秋に入ってからパツとしない。神戸新聞杯では5着、京都新聞杯では7着に沈み、菊花賞ではとうとう人気も5番人気にまで落ちてしまっていた。

皐月賞を勝ったウマ娘は距離適性的に菊花賞には出走せず、クラシック級ながら天皇賞（秋）に挑戦する。

ちなみにクラシック級で天皇賞（秋）を勝ったウマ娘は過去に1人、それも第一回、天皇賞が「皇室御賞典」という名前で、何もかもが全部違っていた時代にたったの1人しかない。年数にして60年弱は出ていないことになる。

もともと第二回目からは菊花賞の前身となるレースが創設された兼ね合いでクラシック級のウマ娘が出れなくなっており、再び出れるようになったのは8年前のことだが……それでも、7回あってもまだたったの一人も出ていない。あの伝説のウマ娘・オグリキャップがクラシック級の身で挑戦した時でさえも、白い稲妻・タマモクロスの前

に敗れている。

頭悪い癖して何でこんなに物知りなのかって？ ……調べたんだよ。アタシも出た
いからさ、クラシック級で。マヤノとスリリンと一緒に走って、それで勝ってやりたい
から。

それはさておき。ダービーウマ娘が不調で、皐月賞ウマ娘も不在。そうなれば他に目
立つ実績があるウマ娘はティアアラ路線からまさかの菊花賞参戦を決めてきたオークス
ウマ娘くらいしかおらず、とはいえティアアラ路線のウマ娘が三冠路線のウマ娘と、それ
も3000mという舞台の菊花賞でどこまでやれるかなんて誰も分かるはずもなく
……大混戦も大混戦といった雰囲気醸し出していた。

マヤノトップガンは春夏に実績を残せていないどころかダート短距離を走ってい
たり、ほぼ休みなしでレースに出っぱなしなのがマイナス材料になり……しかしトライ
アルで連続2着したり、なんなら今まで一度も掲示板を外していないという安定感もあ
ることからか3番人気にはなった。もっとも、消去法的な3番人気ではあるだろうけど
……。

地下バ道。スリリンと一緒にマヤノの見送りをする最中、すれ違うのはオークスウマ
娘。桜花賞ウマ娘……香水の先輩と何か話している。

「あ、ワンちゃんー！」

「ワンちゃんいうなマヤノ」

反応速度早いな。

「この子は……ああ。マヤノトップガンさんですね」

「そう。その子があたしとデビューを一緒に走ったマヤノ。……強いよ、この子は」

香水の先輩の紹介の後、オークスウマ娘は丁寧にお辞儀をした。まるで社交ダンスの衣装のような勝負服と相まって、なんとというかすごく気品がある。なるほど、名家出身のウマ娘だけのことはある。

「3000m。お互い未知の舞台ですが、いい勝負をいたしましょう」

「うん。マヤは負けないよ。覚悟しててね」

「そちらこそ、ティアアラ路線のウマ娘だからといって侮ったら……ぶつちぎりますよ。完膚なきまでに、ね」

「っ……………」

丁寧な口調とは裏腹に目を大きく吊り上げ、内に秘める激しい闘争心を剥き出しにするオークスウマ娘。この子、実はかなりの気性難らしい……………」

しかし、マヤノは怖気付くどころか逆に闘志に火がついたみたいで。

「さっき言ったでしょ。マヤは、負けないって」

「ふふっ……………なるほど……………」

逆に不敵な笑みを浮かべ、睨み返してみせた。

他にも周囲を見渡せば、前年度の三冠ウマ娘であるナリタブライアンさんに風貌がそっくりである2番人気のウマ娘が、ナリタブライアンさん本人に気合いを入れられたり。復活を目指すダービーウマ娘が1人で目を閉じ、相変わらず異様すぎる雰囲気をとわせて集中をしていたり。その他色々なウマ娘が菊花賞の大舞台を前に、それぞれ想いを膨らませて気合いを入れている。

その中から、最後に笑うのはたった1人だけだ。

ファンファーレが響き、地を揺るがすような歓声が京都レース場を支配した。やはり、G1レースのある日のレース場は人と熱気があふれている。前のアタシならその空気に流されて一緒に盛り上がりたところだけでも、すでにアタシはデビューした身。この舞台上で走るようになったアタシからしたら、できうる限り落ち着いてレースを見て、マヤノが走る姿をこの目に焼き付けておきたい。

でもやっぱり。マヤノの記念すべきG1デビュー……興奮しない訳ないよね。だから、矯正ギプスを着けることにした。

「……トレーナー。隣、いいいい？」

そう。トレーナーという矯正ギプスである。

「ああ、構わないが……他の娘とは観ないのか？」

「うるさい。ただ落ち着いて観たいだけ。勘違いするな」

「あはは……了解」

という訳で、アタシはスリリン達と別れてトレーナーの隣でレースを観ることにした。まあ、一応レース展開とかをプロ目線から色々聞けるし……アタシももう、トウインクル・シリーズを走るウマ娘だし……はしゃいでなんかいられないっていうか……ぶつぶつ……。

「どうした？ もうレース始まるぞ？」

「えっ……あ、ホントだ!？」

気が付けば大外のウマ娘が最後のゲートインをするところだった。そして、ゲートに入るや否や待ちきれない観客たちがざわつき始める。

「……マヤノ。頑張れ」

はち切れそうな心臓を抑えて呟く。それから、ゲートが開くまで時間はかからなかった。

第16話 マヤノがんばれーっ!!

ゲートが開く。その瞬間どつと歓声が上がリ、すぐに静まっていく、しかし興奮が持続してざわつきは収まることを知らない。

3番のウマ娘がいいスタートを切ったのは見えたが、マヤノはそこまでいいスタートには見えなかった。緊張しているのか、それとも余裕の顕れなのか。ただ、このレースは3000mもある。強いウマ娘なら、多少の出遅れは誤差にまとめてしまえる。

そして、きつとマヤノは、強いウマ娘だ。ほら、自信ありげな表情を見せて後ろからするすると上がってきた……！ 最初のカーブに差し掛かった時には4番手くらいの先行にしては非常にいい位置を獲得していた。

向こう正面に差し掛かり、再び大きな歓声が沸き上がる。各々応援しているウマ娘に向かつてありつたけの声を掛けていく。それが大音声の塊となつて、この京都レース場を支配していく。

「落ち着いてる……凄いな、マヤノは」

隣にでているトレーナーの口がそう動くのをアタシは見た。

先頭2人、そのやや後ろに1人。先頭集団3人、それを見るようにやや離れた位置か

ら虎視眈々と4番手を追走するのがマヤノトップガンだ。実況では5バ身から6バ身と実況されている。

前にいる3人、特に先頭2人が並んで前をぐいぐい引つ張っていて、G1の熱気のせいか、3000mという未知の舞台のせいか……とにかく前にいるウマ娘たちは何となく冷静さを欠いているようにも見えたので、無理には追いかけないという判断なのだろう。離れてても分かる。普段はあんなに子供っぽいのに……今回は明らかに、マヤノは落ち着いている。

「何を今更当たり前のこと言ってるの。凄いでしょ、マヤノは」

「はは、そうだな……」

するとトレーナーは息を思い切り吸い込んで、

「マヤノー！ 凄いじゃないか！ いいぞ、そのペースだ！ ……みぎやつ」

突然叫び出した。何か先を越された気になって腹立ったので脇腹に肘鉄くらわせて悶絶させた。心配しないでほしい。手加減してる。

「マヤノー！！！！ がんばれーっ！！！！」

うづくまるトレーナーを気にせず、アタシも追ってマヤノに声援を届けた。多分6倍は声出た。ウマ娘ですから。

マヤノの後ろからナリタブライアンさんにそっくりな、2番人気のウマ娘が機を伺っ

ている。この娘は春先から三冠路線で活躍しており、G1の舞台でこそいい走りが出ていないが、前走の京都新聞杯ではマヤノに勝っている。彼女も彼女で何だか自信ありげな笑みを浮かべて追走している。今回も勝るとでも思っているのだろうか。

1番人気のオークスウマ娘は中団、ちょうど真ん中の辺りでレースを進めている。さすがフランスを経験しているだけあってか、三冠路線のウマ娘と一緒に走っていても怖気づくなんてことはない。特にその他の問題もなさそうで、最終直線でこの娘が後ろから飛んできそうな雰囲気は今からでもポンポンしている。

そして、秋に入ってからの不調で5番人気にまで落ちてしまったダービーウマ娘。最後方近くで、有無を言わせぬオーラを放ちながらじつと静かに追走している。ダービーで燃え尽きてしまうウマ娘は多かれど、自分は決してその類ではない、断じて一発屋などではない。……そんな叫びが聞こえてきそうなほどに闘志をみなぎらせ、その証拠に軽く周りが委縮しているのさえ感じ取れた。

そう。ここはG1。たった18人の選ばれた強いウマ娘だけが走ることを許される、至高の舞台。

そして、強いウマ娘は例外なく、強い想い、誰にも譲れぬ想いを胸に秘めている。その18人の、1人のウマ娘が背負うには、胸に秘めるにはあまりにも大きすぎる想いが剥き出しとなって、ぶつかり合うのがこの場所、ターフの上だ。

大勢の観客に囲まれてもなお、人を潰すことも容易であるその危険な想いの集合体は中和されることを知らない。そしてマヤノは、そんな並の人間やウマ娘では潰れてしまうような舞台の上で……全くひるむことなく、むしろ楽しむ余裕すらあるように……堂々と走っている。

「……………」の子は、凄……い……………」

近くにすぎたから、気が付かなかったのか。マヤノの秘めていたスターたる素質に初めて触れた気がして、アタシは鳥肌が立った。遠く離れているこの場所でも、アタシは軽く、18人の想いの集合体に気圧されてしまっているというのに。

アタシの両眼でしっかりと、マヤノトツプガンというウマ娘を睨みつけるように見えないと、立っていることすらままならない気さえしてくる……!!

第2コーナーを曲がってレースが動く。3番手に控えていたウマ娘がここで前に行き、一気に先頭を奪ったのだ。そのままじりじりと、元々先頭だったウマ娘との距離を離していく。そして、4番手のマヤノトツプガンも、4番手のまま、先頭を走る3人との距離を3バ身ほどくらいまで詰めていった。マヤノの後ろを走るウマ娘たちもマヤノの動きに追従し、やや縦長だった集団が縮まっていった。

3000mは長い。長い、決してただのんびりと走っているわけじゃない。ライブルを出し抜くためにどこで仕掛け、どこで手を打つか、その仕掛けに乗るのか、乗らな

いのか……スタミナ管理をしながら、常に駆け引きをしているのだ。

バックストレッチ。一気に集団がぎゅっと縮まったが、スタミナ切れだろうか、最後方を走っていたウマ娘は早くも集団から引きはがされて脱落した模様だ。しかし、誰も振り返らない、確定した敗者のことなど見向きもしない。たった一点、優勝のみを見つめているから。

「……仕掛けるなら、ここかもしれない」

間もなく第3コーナー、京都の坂を上って下る……ここが、マヤノにとつての勝負所になる。

マヤノの身体がハッキリと前に傾いた。射程圏内、捉えにかかると……!

あつという間に先団に追いつき、3コーナー下りに差し掛かって、重力の速度を乗せながら外から被せにかかった!

「マヤノー——っ!!」

アタシは思いつきり叫んだ。熱に突き動かされるように。

みんな分かっている。ここでレースが、動く! レース場のボルテージも跳ね上がり、ありとあらゆる場所から応援の歓声が飛び交う。

上がってきたマヤノのさらに外から、マヤノのことをずっとマークしていた2番人氣のナリタブライアンさん似のウマ娘も上がってきて先頭4人でコーナーを曲がって

く。後ろからも我先にとウマ娘たちが殺到していき、無秩序にばらけ、拡がり、コースを探し……芝を踏みしめ、踏み込み、蹴っ飛ばし、それぞれの想いを乗せた一完歩が、地面を焦がしていく。

たった一つの、栄冠を得るために。

……でも。もう、4コーナーで誰が勝つか、決まっていたような気がした。

『マヤノトップガンが先頭か！ マヤノトップガンが先頭で今、直線コースに向きました!!』

その瞬間、アタシには見えたのだ。マヤノの背中から、戦闘機の翼が力強く真っ直ぐに伸びるのを。

アタシには聞こえたのだ。

——ジェットエンジンが唸りを上げて、音速の壁をぶち破るのを——!!

「行っけええええええええええつ!!!」

アタシが力いっぱい叫ぶのと同時に、マヤノがぐつと芝を踏みしめて離陸ディケオフした!!

黄色と緑の風をまとって、誰にも追いつかれないような速度で突き進んでいく。マヤノのことをマークしていたナリタブライアン似のウマ娘はすぐに辛そうな表情になり

置いて行かれた。オークスウマ娘を始めとした後方勢が捕らえにかかるが、多分追いつく前にゴール板が最初にやってくるだろう……!!

ダービーウマ娘が何だ。オークスウマ娘が何だ。前哨戦を勝った、春も活躍した、だから何だ。

大混戦? いや、違う。いざ蓋を開けてみれば、たった一人の最強のウマ娘が後続のウマ娘たちを引き連れて、誰からでも分かるような圧倒的な実力を見せてしまった。

そう、その名は。

『マヤノトップガン先頭! マヤノトップガン先頭! リードーバ身でゴールインっ!!

菊花賞を制したのはマヤノトップガンです!!』

電光掲示板に示されたタイムに、観客がどよめいた。

3分4秒4。

そのタイムは、前年度7バ身差という圧倒的な強さを見せ三冠を達成したナリタブライアンさんのタイムよりも、0.2秒速かった。

—菊花賞 結果—

1着 マヤノトップガン 3番人気

5着 フランス帰りのオークスウマ娘 1番人気

6着 ダービーウマ娘 5番人気

7着 ナリタブライアンさんにそっくりなウマ娘 2番人気

第17話 マヤノ、勝利のランディング!

マヤノトップガンの菊花賞1着入線を見届けた後。

「行くぞ、バブル」

「……どこに」

「決まってる。ウイナーズサークルだ!」

トレーナーはアタシを置いてつて駆け出してしまった。人の多いレース場の観客席だっというのに。

「お、おい! ……まったく、クソガキみたいですね!」

「クソガキで結構!」

アタシの皮肉に笑いながら返すクソガキトレーナー。……まあ、気持ちは分かるから今回ばかりは許す。

だって、アタシのずっと隣にいたマヤノが、苦労を重ねながらも頑張ってきたマヤノが……今こうして、G1の大舞台で勝ったんだから。

最初のうちは成長痛に悩まされてジュニア級全休を余儀なくされて、その上デビューしたての頃は得意条件でないコースを走らざるを得ず。それでもまず1勝を挙げ、芝の

レースも使えるようになって、勝利を重ね、菊花賞への優先出走権も手に入れて。

トウインクル・シリーズで競い合ううちに友達も増えて。栄光を祝福したり、夢を託されたりもして……そして、今、マヤノは。

「トレーナーちゃんっ!!」

菊花賞を勝ったのだから。トレーナーとアタシが姿を現すと、マヤノは真っ先にトレーナーの方に駆け寄ってきて胸元に飛び込み、思い切り抱き着いた。

……まあ、許そう。内心ゆるせねえが……マヤノをここまで導いたのはトレーナーのおかげであることはアタシにも分かってるし、何よりマヤノがトレーナーに懐いているし……。

「ねえねえねえねえ! トレーナーちゃん、最後までマヤノのこと、ちゃんと見てた!」

「当たり前だ」

「マヤがゴールするところも!」

「もちろん。しっかり見てたぞ」

「えへへ……マヤ、勝ったよ。勝ったんだよ!! 菊花賞で! G1で!!」

こんなにもはしゃいで喜んでるマヤノを見たことはない。というか3000m全力で走ってあれだけはしゃげるのは割と化け物なのでは……? さすがのトレーナーも若干引き気味でマヤノのことを構っている。

「トレーナーちゃん! マヤにごほうびちよーだい! とびっきりのチュー、してほしいなー!」

ぶふつ。何を言い出すんだこの子は。我慢しろアタシ、トレーナーの良心に託せ……。

「さ、さすがにそれは……」

「えー!? もしかしてトレーナーちゃん、マヤのことキライなの!?」

「いや、好きとか嫌いとかそういう問題じゃなくてだな……」

「じゃあオトナのチューしてー!!」

……ごめん。無理。我慢ならない。

「成敗!!」

横つ腹に思い切り蹴りを入れた。もちろん、トレーナーの方に、である。

「ぐおあぶつ!! ……お、おい、迫られたの俺の方……だぞ……」

「男ならハツキリ断れ、ヘンタイがあつ!」

「……りふじん……」

これでよし。悪は去った。

「マヤノ。オトナのオンナっていうのは、自分からおねだりしないの」

「んー……そつか。つて、バブちゃん!」

「あはは……バブちゃんです」

改めて、マヤノの姿を見る。やっぱり、単純に可愛いとしか思い浮かばない。あの子の一体どこに、あんなレースが出来る力が秘められているのだろう。さっきのレースの熱気がまるで夢か幻か、どっちかだと思ってしまうほどに、マヤノはただただ可愛かった。

「今日も可愛いねマヤノ……でふふっ」

「バブルの方がよっぽどだと思っただがな……」

何か下の方でトレーナーとかいうしにぞこないの生き物が変な事言っているが気にしない。アタシは両腕を広げた。

「おめでと、マヤノ」

「……ありがとう」

ぎゅ。マヤノの身体は、レースの熱でしつかりと火照っていた。心が火傷してしまうほどに熱かった。

やっぱり。あのレースは、本物だったんだ……。

勝利インタビュー等をひとしきりこなして落ち着いた後、地下バ道に向かうと見慣れた2つの影がマヤノを待っていた。

「マヤノーっ!! スリリングな菊花賞勝ち、おめでとうっ!」

「スリリンちゃん!」

「おめでとう、マヤノ! これであなたもあたしと同じ、G1ウマ娘ね」

「ワンちゃん! えへへ、みんなありがとっ!」

スリリンとは拳をこつんと合わせ、香水の先輩にはぎゅつと握手。勝ち誇ることはせず、単純に勝利を喜んで嬉しいという感情を振りまくマヤノは、やっぱり見ているだけで周りの人々を幸せな気持ちにしている。

でも、香水の先輩の表情は、やや複雑だった。

「……でも、マヤノ。喜ぶのもここまでにする」

「ワンちゃん……?」

それもそのはずだ。何故なら、彼女は。

「今までは友達。でも、これからはライバル。……『有マ記念』」

「……!」

宣戦布告をしに来たのだから。

「あたしの次走はエリザベス女王杯。そこであたしは真の女王になって……それから、

有マであなたを倒しにいくわ。『もう一度』、ね」

5着に終わったマヤノのメイクデビューで、1着になったのが香水の先輩だ。だから、『もう一度』なんだろう。

「でも、あなたはずっとレースに出っぱなしでもある。もし身体の調子が良くないのであれば、無理をせず回避なさい。ケガをするのが一番良くないのだから」

「うん。ワンちゃんこそ」

「ん……そうね」

香水の先輩は自らの太ももをさすった。確かめるように。

「あたしは、大丈夫よ。マヤノと走るために……」

そして、自分に言い聞かせるようにそっとつぶやいたのだった。

「それじゃあね。あたしはあのオークスウマ娘を煽らなきゃいけない使命があるから」

「……う、うん。じゃあね、ワンちゃん！」

どんな使命だ、と心の中でつぶやく。どうやらスリリンも同じことを思っていたみたいで、顔を見合わせて苦笑した。

けれど、さっきのやり取りで、マヤノは何か引つかかるものがあつたらしい。

「ワンちゃん、本当に大丈夫かな……」

マヤノは察しがいい。何でも、わかっちゃう。

そして、やはり今回も……わかってしまったのだった。

翌週のエリザベス女王杯。アタシとマヤノ、そしてスリリンとで京都レース場に応援に来たのだが。

『サクラキャンドル！　サクラキャンドル！　サクラキャンドル今先頭でゴールイン！』

勝ったのはヴィクトリー倶楽部出身、人気薄のサクラキャンドルという娘だった。

「ワンちゃん……」

香水の先輩は距離不安ながらも他に実績のある娘がいなかったため、4番人気を背負ったが……。

「いくら距離が長いにしても、これは……」

「……さすがに、負けすぎ」

「そうだな……」

……18人のうちの16着という惨敗を喫ってしまったのだった。

第18話 3つの『呪い』

華やかな勝負服に身を包んだ香水の先輩がレース場から引きあげてくるのを、アタシ達は地下バ道に迎えに行つた。表情は、むしろ清々しい。あれだけ大負けすれば、逆にそうなるのか。

「えつと……レース、お疲れさん」

「ありがとう。……気を遣わなくてもいいのよ、スリリン。それにみんなも」

すると、香水の先輩は息をひとつ深く吐いて話し始める。

「あたしき。メイクデビューで戦つたマヤノがこんなに強くなつたの、とても嬉しかったの。とても嬉しかったし……マヤノが強くなつた上で、もう一度上回つてやろうと思つた。マヤノを負かして、下剋上果たして……あたしが一番になりたかつた」

「ワンちゃん……」

「でも、欲張りすぎたかもね、あたし……あたしの身体に」

先輩の脚。マヤノと同じように、成長痛ソに悩まエされた先輩の脚。それでも下剋上を果たしての桜花賞1着、オークスでも距離不安を覆す3着。

「ワンちゃんは、今までだつて出来すぎだつた、つて言いたいのか？」

「……」

マヤノは、時々遠慮がない。

「そんなことないよ。全部ワンちゃんの実力。その時その時の実力が、他のウマ娘たちより上回ってた。マヤに勝ったときだってそう。桜花賞だってそう」

「でも……」

「マヤ、『わかる』んだよ？ ワンちゃんは、強かった。絶対」

マヤノの真つ直ぐな瞳が先輩を射抜く。射抜いた、けれど……すぐに、目を逸らした。「でも。きつと、有マ記念は……向いてない」

「……」

「ワンちゃんの上に、中山の2500はちよつとつらいと思うんだ……」

それは『わかる』からこそ、出たセリフ。思いやるからこそ、出たセリフ。

……嘘が付けないからこそ、出たセリフ。

「……でも……あたしは……」

「ワンちゃんはさ。出る前から負けると分かり切ってるレースに、出たい？」

でも、さすがにそのセリフは言いすぎだ。アタシがなだめようとしたが、その前にスリリンが制した。

「ちよつとマヤノ、レースに絶対負けるとか勝つとかってのはないんだぞ！ 去年のナ

リタブライアンさんだつて、菊花賞の前に1回負けてるんだ、だから……」

「ありがとうスリリン。でも……今回は、マヤノの言う通りよ」

「先輩……でも……！」

香水の先輩はうつむきながら、静かに口を開く。

「……あのさ。『想い』とか、『憧れ』とか、『夢』つて……どうして、あたしに呪いのようについて、ずっと心の周りをぐるぐると回るんだらうね。これがあるからといって勝てるような万能薬じゃないのに、あたかもそのような顔をして、あたしについて、どこまでもついて回ってくるんだ。本人たちはキラキラと、悪気なく無邪気に輝きながら」

「……」

「『下剋上したい』『一番になりたい』そして……『マヤノに、大きな舞台で、勝ちたい』
誰も何も言えなかった。マヤノだつて、言えなかった。

「……それがあたしの『想い』。あたしの、『呪い』……」

……トウインクル・シリーズというのは、そういう場所だ。『想い』『憧れ』『夢』。キラキラした言葉に躍らされて、走って、走って、走って、走って、でも、それが完璧に成就するのはほんの一握りのウマ娘で。

香水の先輩はG1を勝っているのだから、むしろ成就した側だろうとでも言いたくもなるけれど、そういうのつて結局、本人が納得するかしないかの問題だと思うし。

……それに、残念ながら。ウマ娘は、ひとつの夢が叶ってもそれで満足をせず、次の夢をどこからか持ち出して、抱えて、また走り出すような……そんな、欲望深い種族なのだ。それはもう、アタシ達が生まれてから、いや、生まれる前から、ウマ娘というのはそういう風に出てくるものだから、仕方がない。

「……ごめんなさい。この後については、あたしのトレーナーと話して決めてくる。でも、多分……マヤノの言う通り、有マは無理かもね」

「ワンちゃん……」

「それじゃあね。マヤノ、スリリン。それに、バブル。みんな、お元気で」

先輩は変わらない香水の匂いをその場に残しながら、アタシ達の前から歩いて去っていった。出会った時にはややうざったく思った不思議な香水の匂いが、今はやけに寂しく思えた。

……アタシだって、一応ジュニア級のウマ娘だ。レースを走って、自分のために勝つ。折り返しのメイクデビューを勝っていたアタシは、エリザベス女王杯の翌週のジュニア級のレースに参戦した。マルゼンスキーやシリウスシンボリといった、名だたるG1

ウマ娘たちも勝った由緒あるこのレースに、アタシはトレーナーに実力を見込まれて登録をされていたのだった。

そして。

『内が優勢だ！ 外のウマ娘も詰めるが差が開いていく！』

2連勝。しかも、そこまで、全力を出したわけじゃない。ペースが緩かったうえ、簡単に2番手につけられたのも大きい。運も味方していた。

とはいえ……そんなにここって、簡単に勝つていい世界なの？ いくらアタシが、前世でも陸上で期待のホープ扱いされてた、としてもだ。

——『思い』とか、『憧れ』とか、『夢』って……どうして、あたしに呪いのようになって、ずっと心の周りをぐるぐると回るんだらうね——。

「……次のレースは、絶対に勝つから。もしかしたら、皐月賞かも……！」

2着のウマ娘……あれはきつと、サクラキャンドルさんと同じヴィクトリー？ 楽部のウマ娘だろう。その子に声をかけられ、宣戦布告をされたけれども。

「うん。……負けないよ。アタシも」

セリフだけ格好つけても、アタシは。

「言ったね。そのセリフ、後悔しても知らないよ。今日よりも数倍強くなった私に負けて、さ……！」

「……うん……」

彼女の熱には、到底及ばない気がした。

アタシには。

今の所、さして際立った理由がない、アタシには。

アタシには。他のウマ娘達が抱える決死の想いをことごとく踏みつぶして、勝利を手に入れる権利は。

「……あるの、かな」

アタシの疑問は誰にも届かずに、宙に消えた。

第19話 アタシの夢は

「あのさ、ネイチャー！」

「うお!? ……急にどうしたー? 今をときめくジュニア級の有望株さん。何だか切羽詰まった顔してるけど」

「悩みっていうか、相談っていうかさ……!」

「ん? なんじやらほい。このネイチャさんに言ってみんさい」

悩みがあつたらとりあえずネイチャだと思う。アタシはこの前の香水の先輩の敗戦から始まった、一連の悩みについて話した。

『想い』『憧れ』そして『夢』。あの先輩が言っていた、ウマ娘の持つ3つの呪いについて。

そして、今の段階のアタシはそれをあまり持ち合わせていないことについて。

「でさ、思っちゃうんだよね。そんなアタシが、他のウマ娘の気持ちを踏みつぶしながら、勝っていいのかな……って」

「……何というか、それをこのネイチャさんに話します? って感じだけど」

「そ、それはごめん……でも、他の強いウマ娘ってみんな何かしらそういうの持つてると

「うか、そんな感じがしてさ。ちよつと引けちゃう、つていうか……」

「まあ、確かに。それならアタシに来るのも分かるけど……あ、ちなみにマヤノには言つた？」

「まだ言つてない。でも、察するんじゃないかな、そのうち」

「ふうん……」

我ながら答えに悩みそうな質問を投げってしまったな、と思った。けれども、ナイスネイチャはさして悩まない。

「でも。トウインクル・シリーズは強いウマ娘が勝つ。それが当たり前なんじゃないかな。少なくともアタシは、そう思つて走つてる」

「その、強いウマ娘ってさ。何が強いのか？ 力？ 想い？」

「ん……力、かな。結局想いつていうのはさ、力を増幅させるための装置に過ぎないと思う」

「……なんか意外な回答だね」

「こう見えてネイチャさんはクールですから。それに、想いだけじゃどうにもならない世界だつてのは、身をもつて体験してるから……」

ネイチャはそうやって、遠くに目をやった。目線の先には、トレセン学園のグラウンドと、練習をするウマ娘の声……。

「ごめん……」

「いいのいいの。伊達に何年シニア級やってると思ってる？ 4年だよ、4年。これだけシニア級やってたらさすがに達観してくるって、色々」と

再びアタシに視線を戻してくる。

「だからさ。別に勝つても全然いいと思うよ。それで勝つたとして、他のウマ娘が恨み言を言う資格なんて全然ないから。それに……気持ちに振り回されて勝てるレースを落とすのはもったいない。応援してくれるファンのためにも、ね」

「ファン……」

「バブルにもいるでしょ？ 応援してくれるファン」

「それは、まあ……」

「中には涼しい顔して勝つバブルに惚れたーって声もちよいちよい聞くよ。ふふつ、モテモテじゃん！」

「ち、ちよつと恥ずかしくなるからやめてよ」

「あはは。でも、『走る理由がない』というのは、絶対になんじやないかなって思うな」
すると、ネイチャは。

「マヤノと走りたいんですよ」

ウインクしながら、そうやって凶星をぶち抜いてくる。

「……分かりやすい?」

「そんなの、マヤノじゃなくても分かっちゃうよ。去年のあのマッチレースからずっと、マヤノとトウインクル・シリーズで走りたい、って……思ってるんでしょ? バブルさ
ん?」

「もちろん。あの時はダート短距離でお互い得意条件じゃなかったのもあるけど……
やっぱ、負けっぱなしって悔しいじゃん? いくらアタシがマヤノが大好きとはいえ、
悔しいものは悔しいよ」

「いやー、青春だねえ」

「ネイチヤあんた何歳よ……」

まあ、何歳か分からないウマ娘は他にもゴールドシップという学園の怪奇がいるんだ
けど……ネイチヤのそのじじくさーいムーブも大概だと思ってる。

「ま、多分それ、ネイチヤさんがお先しちゃうかもだけど」

「え?」

「今年の有マ記念。多分、出るから」

「あつ。ズルいしそれ!」

それでも有マ記念に出るというワードが簡単に出てくるあたり、彼女もまたもの凄い
ウマ娘であるということを実感させられる。もつとも、そんな一流ウマ娘のオーラは皆

無なのだけど。いい意味で、さ。

「……でも、ありがとね。何となく悩みが軽くなった気がする」

「いえいえ。ことトウインクル・シリーズにおいては、アタシはバブルよりも大先輩なのですから。何かあつたらこのネイチャさんお悩み相談室に来るといいよ？」

「うん。じゃあ毎日行く。特に今熱い悩みはねー、そろそろマヤノと夜のドッグフアイトを繰り広げて」

「アంత出禁ね」

「そんなー!？」

地下バ道で、アタシはあるウマ娘を待っていた。

「つしや! 阪神1400m、スリリングにクビ差勝ちだつ!!」

菊花賞の優先出走権を逃したスリリンは、下のクラスで立て直しを図ると言っていた。スリリンは前走の京都1600mで3着をした後、このレースで逃げるウマ娘を先行策で追走し、最後の最後まで分からない大接戦をギリギリで制した。

ちなみに、今日の応援はアタシだけ。マヤノは有マ記念特集の雑誌の取材が入ってて

不在。香水の先輩は……単に、用事が片付かないと言われてしまった。

「おめでとー！ スリリンはこれでオープン入り、だっけ？」

「その通り。これで、名実ともにウチもエリートウマ娘の仲間入りって訳だ！ ……は、何か自分で言っておいて照れるな……」

「よっ。エリート！」

「よせつて。ていうかエリートなのはバブルもじゃないか」

「……エリートっていうか、期待の星？」

「あはは、どっちかっていうとそっちだな。ジュニア級の期待の星！」

「やめてよ、あんま柄じゃないんだから」

「へへ、お返しだつての」

最近色々あったが、とにかく、このスリリンに関しては順調っぽくてアタシは安心した。2200mだった京都新聞杯では距離不適で二桁着順に沈んだものの、実はこのレース以外は掲示板を外していない。レースに出れば必ず堅い走りを見せるのがスリリンという娘なのだ。名前に反して。

「次のレースはいつになるの？」

「ウチ？ ウチは年内にもう一戦走りたいな。中2週当たりでさ……あ、ちようどクリスマスの時期じゃん」

「ふーん。もしかして、クリスマスプレゼントしてくれるの？」

「あつは！ そーれいいかもな！ メリークリスマス、危険なサンタからの危険なクリスマスプレゼントだ、受け取れー！」

「やばそう」

「あ、中身爆弾な」

「迷惑」

スリリンは自分で言っておいて爆笑した。

「あつはー、笑った……で、バブルは来週だっけ？」

……そうだ。アタシのレースは、もう。

「もちろん。……『朝日杯ジュニアステークス』」

「……ジュニア級王者決定戦、だな」

「そう。ジュニア級唯一のG1……絶対に勝つよ」

もう、迷いはない。たとえ簡単に勝ててしまっても、他のウマ娘を泡のように潰しても。

「アタシ、勝てるものは、全部勝つから。それが……」

「『トウインクル・シリーズ』。だろ？」

「何でセリフ取るのよ。……ま、そうだけど」

口角が気持ち悪く上がってしまうのが分かった。

あはは。何でだろう。確かに、トウインクル・シリーズで全力のマヤノと走りたい、という夢はある。けれど、その夢は最短でもまだ1年弱はかかるような、おぼろげな夢だ。そういう意味で今のアタシは、特に差し迫った夢も、胸に秘めた激しい想いも特にない。応援してくれるファンの期待に応えたい、G1ウマ娘に早くなりたい、という気持ちは確かにあるが、多分もつと大きな事情とか、理由があつて、そういう想いを持つウマ娘は他にわんさかいるはずだ。

でも。やはり。ウマ娘は。

「走りたくつて、たまらないな……！」

ウマ娘は、そういう生き物なんだろうな。

第20話 その想い、成就させないから

「初めてのマイル戦——つまりは、距離短縮ということになる。マイル戦はより瞬発力とスピードが大事になる。そして、今回出走してくるウマ娘の多くは海外から来ていて、どの娘もその力に秀でている。何よりこれはG1だ。今までのレースのようにはいかないだろう」

「何を偉そうに。要は全部ぶちぎって勝てばいいんでしょ？」

「まあ、それはそうなんだが……」

「なら簡単。……勝つよ、アタシは。練習メニュー、早くよこして」

案外、1週間というのは早く過ぎ去るものだ。トレーナーから渡された、マイルを意識したトレーニングメニューをこなす。

「朝日杯ジュニアステークスに出走するウマ娘の中で、一番の注目を浴びています。今の気持ちは？」

「……私という存在に注目して頂いて、とても嬉しいです。ええつと……期待に恥じめ走りを見せられるよう、が……頑張らなければ……という気持ちで、いっぱいいっぱいです」

慣れない取材も何とか……何とか、こなして。

「ぶっ。いっぱいいっぱいって何だよ、バブル」

「スリリンうっさい！ 取材つて緊張するんだって！ てか、そのくらい修正してよ編

集のヤツ……！」

んで、不本意ながら友達にからかわれながら。

「……マヤノお……」

「ん……？」

「寝れないよお……」

前夜を迎えた。

「一緒に寝てあげよっか？」

「うん……一緒に寝るう……」

ドキドキが収まらないアタシは、マヤノのベッドに移動した。マヤノは布団を広げて、ぼんぼんとアタシに入るように促してくれた。

ちなみに、マヤノの菊花賞のときはそんなことは……ちよつと、あった。

『バブちゃん。ねれない……』

眠たげに甘えてくるマヤノは控えめに言つてめつちや可愛かった。めつちや可愛かったが、アタシを抱きかかえるとすぐ寝息を立てるのだからまあ死ぬよね。

……そして、そんなことをちよつと思ひ出して、アタシもマヤノをぎゅーつてすれば寝れるかな、つて思つただけだ。

「すびー……」

「……………」

マヤノは寝るがアタシは寝れないのだ。マヤノは寝るが。

「くそ、羨ましいなおい……」

頬を指でふにふにする。やわらかい。マヤノは起きない。

「……………」

まあ、でも、マヤノの抱き心地はすごくいいし、あつたかいのもあるので、そのうち多分寝れるだろう。多分……ねれる……………」

「ん……………」

自分から目を醒ました。快適な睡眠だった。

寝れた。奇跡的だった。おかげで体調は十全だ。ありがとうマヤノ枕。

「すや……………」

そんなアタシの快眠の恩人であるマヤノは、アタシの腕の中でまだ寝てる。かわいい。かわいいけど……。

「どうしよつかない……動けないんだよね、このままだと」

結局起きないように頭をなでながらマヤノの起床を待つことにした。けれどいつまでたつても起きる気配が皆無なのでさすがに起こした。マヤノには悪いけどね。休みの日なら起こささないから許して。

……てか、マヤノのことをまるで猫みたいな扱いをしてる気がするな？

「んう……やだ、ねむい……」

「もうそれなりの時間だから。起きて。朝ごはん食べに行くよ」

「そっか、今日はバブちゃんのこと……ううんっ……！」

マヤノは大きく伸びをして、勢いをつけて上半身を起こした。頭がめっちゃぼさぼさになってる。かわいい。というか、アタシのレースがある日だからマヤノも納得して起きてくれるのめっちゃくちや尊くてしぬんだけど。

「おはよ、マヤノ」

「んにゃ……おはよー……」

そんな感じのやり取りが、まあ、今朝ありまして。

何か色々やったり。レース場に移動したり。レース見たり。ウォームアップしたりしたら。

「ふー……さすがに、緊張する」

いつの間にか、本番直前って訳ですよ。アタシは黒と黄色を基調とした特注の勝負服に身を包んで、トレーナーとマヤノとで控室にいた。ちなみにこの黄色と黒の派手な色調は、昔ウマ娘のトレーニング方法に大きな進歩をもたらし、超高倍率であるトレセン学園に次々と合格者を送り込んだ伝説の名トレーナーが運営していたクラブが好んで使っていた色だそう。そのためウマ娘に人気で、トレーナー曰く『シャダイ伝統色』と言われているんだとか。

色づかいこそ派手だが、全体としては眩しいとか派手派手な感じでなく、出来る限りクールでスタイリッシュにまとめてもらいたい。そんな注文をつけたら、パーカーのよくなストリートファッションが出来上がってきた。

それにくわえて青いキャップまでついてきた。アタシはそれを注文してないのだが、試しに帽子のつばを逆にして被ってみると、それはもうなんかこうめちやくちやしつくりくる。なんだっけ、そういうの画竜せんせー？　っっていうんだっけ。

しかもそれに慣れると青キャップなしだともやもやするからびつくりする。アドリブで要素をひとつ付け加えてくるという勝負服デザイナーの凄さ、垣間見た気がする。

「やっぱりバブルは凄いな。今日、一番人気だぞ」

「マジか……」

トレーナーから手渡された新聞を見る。なんかこう、やっぱり自分の顔とか名前が新聞に載ってるのは慣れないが、そっか、一番人気か。このアタシが。マジか。

「まだ全力を出してない、底知れない力がある……こういう評判がついてるな。今日のこのレースで全力を見てみたい、という声もあれば、今日もまた涼し気な顔をしてクルに勝つところを見たい、なんて声もある。『バブル王子』なんてあだ名もつけられてるみたいじゃないか」

「なんだそれ……アタシ、そんなキャラじゃないっての」

勝手に変なのつけやがって。まあ、嫌な気はしないんだけどさ。

「王子って感じしないよね。バブちゃんはバブちゃんだよね」

「マヤノ。確かにそうだけどアタシはバブちゃんではない」

王子か赤ちゃんか。二択の振れ幅が極端。

「で、ここからが大事だ。二番人気が……この子だな。新馬戦を7バ身で勝ち、その後ここに出不ないウマ娘に2着をしたあと、今度は5バ身で勝ってるんだ」

「7バ身……」

アタシの勝ち方はそこまで派手な勝ち方ではない。なのに、人気でこの子を上回って

いるのか。

「しかもこの子は全部東京のマイルを走ってる。つまり、この距離自体は経験済みという訳だ。まあ、同じマイルでも東京と中山じゃ全然違うから参考程度ではあるけれども」

「……なるほど」

でも。不思議とアタシは、彼女に負ける気はしなかった。

「少なくとも、この子には気を付けておいた方がいい。他のウマ娘も、以前言ったように海外留学しに来ているウマ娘が多く、そのどれもがマイルに向けたスピードのあるウマ娘ばかりだ。その代わり、スタミナならこちらに多少の分があると踏んでいる。前目につけて粘り強いけば、きっとやれるはずだ」

「言われなくてもアタシはそうする。自分の走りを徹底して、勝ちに行くよ」

「……不要だったか？」

「ふふ、当たり前でしょ」

にやり。ああ、楽しみだ。この服を着て、強いヤツと走りたくて、仕方がない。抑えきれない闘争本能が血液をめぐって、この身全体でひしひしと感じている。

地下バ道で、一人のウマ娘とすれ違う。碧眼の、赤と黒の勝負服に身を包んだ子……多分、2番人気の子だ。

「ちよつといいか。……なるほど。キミが今日の私のRivalだな」

シユツとした綺麗な顔立ちをしている。さすが、海外育ちのウマ娘は美人だと思う。

そんな美人が、アタシに向かって……闘志をあらわにしている。

分かるのだ。絶対に負けないという、気持ちが。

「多分、そう。ふふ……いいレースになりそうね」

「いいレース？ 何を言っている？」

「……」

彼女の形が整った細い眉毛がぐつと吊り上がった。

「勝つか、負けるか。Raceというものは、たつたそれだけだろう？」

「……なるほど」

面白い。アタシはうなずく。

「ただ。私はキミのように手を抜くウマ娘ではない。なぜなら、小さい頃に恩師との約

束——『Promiss』があるからな」

「……」

「恩師は現役時代、そこまで強いウマ娘ではなかったのだが、姉がアメリカ史上に残る伝説のウマ娘だった。私の恩師はその姉の七光りと揶揄されそうな看板をあえて背負って、スクールを開いていたのだ。並々ならぬ覚悟だったろう。

私は、その覚悟を裏切る訳にはいかないのだ。日本にわざわざ来ているのだから、尚更……！」

彼女はぐっと握り拳を作り、そして。

「だから、私は勝つ。我が恩師の恩に、海を越えて報いるためにだ。私が、ジュニア級の頂に立つ！」

ビシツと私に指を差し、文字通りの宣戦布告をしてきた。

「そう。……あなたも、『そういう』ウマ娘なんだね」

「何だと？」

前までは、動揺してたな。アタシは、
でも。

「アタシにあなたみたいなのは、何かのために、誰かのために……そんなのは、存在しない。確かにあるけれども、別に今、それを勝ったところで……って感じ。正直」

「……」

「でもね、アタシは、結果として勝つよ。なぜなら、勝つためにレースに出ているから」
もう、アタシは大丈夫だ。

そんな大げさな、ドラマのような背景がなくなっても。

「どんな『想い』も『憧れ』も『夢』も——アタシには、敵わない。抱く『想い』は無敵だと思わないことね」

「……言ってくれるじゃないか……!」

勝ちに行ける。

全部、踏みつぶせる。

みんなが抱く幻想の泡を——ためらいなく、潰してしまえる。

「……もう、言葉はいらないでしょう?」

「もちろん。どちらがWinnerでどちらがLoserか、ハッキリさせよう」

「ん。それでは、『いいレース』を」

「……」

「いよいよ、幕が上がる。1人の勝者と残り全ての敗者、それが決まる喜劇^{レース}という、幕が。」

第21話 マヤノに続け！

—中山レース場 朝日杯ジュニアステークス（G1） 芝1600m 12人立て—

4枠4番 アタシ 1番人気

7枠10番 宣戦布告をしてきたウマ娘 2番人気

G1のファンファーレ。芝生をも揺るがす大歓声。

『ジュニア王者決定戦、G1朝日杯ジュニアステークス！ 中山マイルのこの舞台。伝統の黄色と黒の勝負服を授かったニューホープが、勢い盛んな留学生たちの挑戦を受けます！』

そして、その主役が……アタシ、らしい。

遠くの観客からのしかかる大きな期待と、近くの出走ウマ娘たちから向けられる敵意。コイツには負けられない、絶対出し抜いてやる……隠そうともされない11人の敵意がアタシに真っ直ぐに向いているのをひしひしと感じる。

今までの競走とはまったく違う雰囲気。そこで、一番人気を背負って、走れと。

テレビの中のウマ娘はすごいことをしてきたものだ、今思う。

だからといって、逃げる? そんなヤツなら、こんな舞台にたどり着いていない。少なくともアタシは、そんなヤツじゃない。

「……やるしか、ないね……!」

気合を入れて一步、ターフを踏みしめる。蹄鉄、しつかりハマってる。ちゃんと地面を掴んで、前に跳ねる力を得ている。ハプニングはない。安心しろ、アタシ。

ゲートインが始まる。過去一番の緊張がアタシを包む。だいたい真ん中あたりの順番でアタシはゲートに入った。その他のみんなも色々な面持ちでゲートに入っていく。

ゲートの閉塞感、何だか特別だ。ゲートに入る前、出た後、全てすごく開けているのに、このゲートにいる間だけは、自分だけの狭い空間が出来ているのだから。特に、このG1の大きな舞台ともなれば……すごく、特別だ。

訪れる静寂。息を深く吐いて目を閉じる。ゲートが開くその瞬間だけは、耳で感じて一步を踏み出す。それがアタシのやり方。

いつでもいい。やってやる。

『さあ、サクラチヨノオーが、アイネスフウジンが、ミホノブルボン、ナリタブライアンが君たちのゴールを待っています。第47回朝日杯ジュニアステークス、ゲートイン完了——』

ガシャン。

『スタートを切られました！ ちょっとバラツキ気味だったではありましようか——』

緊張でやられたか？ 他のウマ娘たちのスタートタイミングはバラバラだった。が、アタシは全然問題ない、悪くないスタートを切って理想的な位置で行けそうだ。最内のウマ娘がやや力み気味に逃げを打つを見て、アタシは1バ身ほど後ろの位置にて2番手につける。

アタシのすぐ隣、外にぴったりくっついてきたのが8番のウマ娘。たしか3番人気か。意識しすぎではないだろうか？ ぐらいに視線を感じる。……惑うな、アタシ。

順調に見えるだろうが、ただ、懸念が1つあって——それがペースだ。

マイルレース、つまり今まで走ってきたレースより200m短い距離。それだけじゃない。G1という雰囲気か、それとも先行したいウマ娘が多いからか、いやどっちもかもしれないが——アタシが経験したことのないペースの速さであることを感じ取っていた。

「これで1600……」

大丈夫か。このままだと間違いなく垂れる。後ろにいる2番人気のあの子に差されてしまう。だから、脚をどこかで溜める必要がある……。

ただ、この好位置を手放したくはない。アタシがアタシのレースをするためには、この位置が間違いなく絶好なのだから。とりあえず位置はキープ、その代わり終盤仕掛け

どころをやや遅らせて、少しでも脚が長く使える状態にして後続を迎え撃つか——ただでさえ他のウマ娘たちに警戒されているのだ、焦って動けば絶対潰れる。情けない自滅だけは避けなければならない。

でも、この油断ならない感じ……前から、横から、そして大勢がいる後ろから、気迫が伝わってくるこの感じ。

そうか、これがG1か。これが世代の頂点を決めるレースというものか。熱が……違う……!

ふふ、面白いな……!

第3コーナーに差し掛かる前で、1人のウマ娘が我慢できずに後ろから加速していき、アタシの横も追い越して先頭に並んだ。ここは仕掛けどころでも何でもない、どうせ掛かって前に行っただけ、最後に失速する。

そして、3コーナーに入った時。アタシの横を走っていたウマ娘が集中力を切らしたのか少しづつ後退していく。……その代わり。

「ハイ」で……勝負しようか!」

「……!」

あの子だ。アタシに宣戦布告をしてきた、2番人気の碧眼のあの子だ。中団に控えていただろうが、ここでアタシに並びかけて勝負を仕掛けてきた……!

「なるほど……でも……ここじゃない。どうぞ先に行つて」

仕掛けは遅らせる。でなければ、速めペースで先行していたアタシの脚はもたない。ここで乗つたら、きつと良くない結果が待っている気がする。今は先に行かせてやろう。

「な……く、後悔しても遅いぞ……!」

あの子は加速を続け、先頭を走るウマ娘を捉える。

冷静さを失うと終わり、冷静さを失うと終わり、冷静さを失うと終わり……!

「むーりいー……!」

4コーナーを曲がる辺りでさつき暴走したウマ娘が下がっていった。アタシはしっかりとインを突いて、最短距離で曲がつていく。

曲がり切つたところで、あの子が先頭を走っていたウマ娘をかわし、さらに加速していくのが見えた。距離が、離れていく。

「頑張れー!」

「負けるな、いけー!!」

「そのままだ! そのままトップで!!」

応援の声。全部が全部、アタシに向けられたものじゃない。でもそれがごちゃ混ぜになれば、実質全部アタシのものだ。

「いけるか、アタシ。中山の直線は短いぞ……!」

ぐっと身体を傾け、芝を蹴り、スパートを開始した。全速で走る、しかし差は縮まらない。

「……っ!」

思ったより、相手が強い。まだ落ちない、まだ落ちない、アタシに追いつき追い越すのにそれなりに脚使ってるっていうのに、まだアイツの速度は落ちない……!

なるほど、これが『想い』の増幅。並々ならぬものを背負って走る、ウマ娘の強さってことか……!

『外を通って、バブルは届かないか、残り200を通過——』

いや。……どんなに想いが強かろうと、生き物である以上、身体の方には限界はある。残り200のハロン棒を通過した。ここから中山の急坂がある。そして。

「ぐ……く……う……」

ここで前のあの子が失速。最後の最後の急坂を上る余力はないか……そうか……!

……その背負ってる立派な想い。全部、全部……水の泡に帰してあげる!!

「ふふ……ごめんなさいねっ!」

「なっ……!」

貯金が活きた。焦らずに前に通した貯金が活きた……!

「つ……は、つ……くそつ……！」

もう相手に勢いはない。全力を出さなくても大丈夫そうだ。セーブできる力はセーブして、ダメージを抑えよう。

そして、そのまま抜かれない程度に軽く流して……だいたい3/4バ身前に出て、ゴール板を切った。

『黄色と黒の伝統色！ 青いキャップ！ そしてチーム・レグルス！ 春のクラシックの合言葉が揃いました！ 勝ったのは——！』

ターフに膝をつく2着の子を尻目に、アタシは悠々と外ラチまで歩いて……軽く握り拳を作り、真正面に突き出した。

どつと沸く観客席。そうか……これが……。「G1で勝つって、こういうことなんだ……」

まだ脚は全然動く。正直不完全燃焼ではあるが、それでも王者の座に立ったことは紛れもなく嬉しいことであつた。

1着 アタシ 1番人気
2着 宣戦布告をしてきたウマ娘 2番人気